

してこれ等山嶽に圍まれたる地は、所謂肥後平野の豊饒なる地を成し、その中央に熊本市の市街あり。水系は其地積廣大なるを以て河流の大なるものに富み、いづれも地勢に従ひて概ね東より西に流る。球摩川は國の南部九州山系の間を流れて、最も雄大なる峽流を成し、菊池川は筑紫山脈の水を集めて國の北境を西に流る。中部には白川と緑川とありて、共に肥後平野を灌漑す。(地形参照更に縣下各郡の地勢に就きて見るに熊本市を包擁せる飽託郡は西部海に瀕し、北部を除くの外概して平夷、良田沃野遠く益城の廣野に接す。玉名鹿本菊池の三郡は山野相半せりと雖も、菊池川に沿へるの地は、良田膏腴所謂菊池米の産地を成す。上益城下益城地方は、東部に阿蘇山聳立すれど、西部緑川加勢川の沿岸は水田遠く相連る。八代郡は東部は山岳深けれど、西部沿海地方は良田廣く相接するを見る。葦北宇土は丘陵起伏し、平野稀少なり。天草は數箇の島嶼より成り、島嶼多く丘陵地にして、唯海岸處々に港市を作る。阿蘇、球磨は共に別區域を成し、阿蘇は阿蘇火山の中に火口原の大盆地を造り、球磨は其中流に人吉盆地を展開せるの外は平野に乏しく、概ね山嶽

産業

峨々として交通不便なるを免れず。

縣下の産業は農業林業水産工業等皆な多大の製産あり。米は肥後米の名は世に聞ゆ。麥は天草の白稗、玉名の小麥等最も名あり。山嶽地方に接する所は製茶業よく行はる。葦北郡の林産また頗る名あり。水産は海岸に瀕する地概して漁獲物多く、殊に天草諸島最も盛なり。牛深の鯉、富田の烏賊等著名なり。製糸業は飽託郡及び熊本市附近をその主産地となす。紙は八代紙宮地紙等あり。陶磁器には水平焼小岱焼高田焼等あり。鑛業は天草の石炭鑛球磨郡の銅鑛等あり。天草は又陶石を産す。

交通

縣下の交通を記せんに、九州鐵道は福岡縣大牟田より來り、長洲高瀬木葉植木を経て熊本市に至り、熊本平原を南に貫き、宇土に於て三角線を分ち、それより全く南して八代に至り、球摩川の岸に沿ひて山間に入り、人吉より南に折れ、矢嶽の險を踰え鹿兒島縣に入る。これ即ち本地方交通の中心を成せる主線なり。宇土より岐れたる三角線は宇土半島の北岸に沿ひて西走し三角港に至る。道路は熊本市を中軸にして四方に輻射し、福岡縣に赴くものは、

福岡三池及び南關の三街道あり。一は植木より山鹿町を走るもの、二は植木より高瀬府本を走るもの、三は山鹿より玉名郡南關に出づるもの即ち是なり。大分縣に出づるものは豊後日田の二街道あり。豊後街道は熊本市の東端龍田口より菊池郡大津に出で、阿蘇郡坂梨を走るものにして、路傍老杉の列をなすを見る。阿蘇山地方に至るものは皆なこの道路に由る。日田街道は熊本市の三間町口を出て菊池郡隈府町を走るものにして、大分縣の津江道に合す。宮崎縣に入るものは熊本市迎町より上益城郡御船町に至り。矢部濱町を經、阿蘇郡馬見原町より宮崎縣界に入る日向街道あり。鹿兒島縣に至る者は、九州鐵路に沿ひて八代に至り、それより佐敷、水俣を經るものにして、往昔はこの一路を肥薩唯一の主要路となし、人馬の交通絡驛たりしが、九州鐵道完成の今日この道路を經るもの寥々たるに至りぬ。天草は群島より成り、多く水運によらざるべからざれど、其下島本渡町より牛深町に至るの一路ありて車を通す。海路は三角米の津津島原間、三角茂木間、三角牛深間、三角長崎間の定期航海線ありて、天草、及び長崎鹿兒島の交通路を成せり。三角港は

長洲町

高瀬町

實に此等航路の要樞に當れり。

吾人は九州鐵道線路より記せんに、鐵路は福岡縣三池地方より來り、海岸に沿うて南し、直ちに長洲驛に達す。長洲町は昔は荒涼たる海岸の一漁村たりしが、停車場設置の後は、次第に繁盛に赴き、今は縣下北部の殷賑なる市邑たるに至れり。海岸に風光明媚なる松原あり。呼んで大明神松原と稱し、前に島原半島を望み、眺望頗る佳なり。毎日島原との間に定期汽船の便あるを以て旅人の肥後及以東の地より島原半島に到るもの皆此の驛に下車するを常とす。町の東一里に、腹赤の濱あり。傳へて景行天皇の行宮を設けさせ給ひし處となす。汽車は長洲驛より全く東し、頃刻にして高瀬驛に至る。高瀬町は菊池川に臨み、水陸運輸の便に富めるを以て、古より繁華の地として聞ゆ。東西四町、南北七町人口四千餘を有し、玉名郡役所區裁判所等あり。此地は明治十年の役に總督有栖川宮の本營を置き給ひし處として著名なり。町の近傍に立願寺温泉あり。浴客常に群を成す。正野村に正野神社あり。肥後四社の一にして、延喜式内の古社なり。位置は小代山の東麓に位し、眺望の勝

南關町

に富めり。堂宇また宏壯なり。
高瀬より郡の北部に赴く南關街道は、菊池川の流に沿ひて、江田藤田を經、これより丘陵の間の平地を過ぎて、四里半にして南關町に達す。町は人口三千を有し、三池地方に近きを以て、市街殷賑、人烟稠密なり。此地は古來瓦師の多く居住せし地にして、俗に瓦屋敷の稱あり。町に障子ヶ嶽權現社、天満宮等あり。障子ヶ嶽には赤星有隆が故城址を存す。江田は一小邑なれど、鹿本郡地方に至る道路の分岐點に位し、稍々繁華なる趣を呈せり。
汽車は高瀬より菊池川を渡り、丘陵の間に犬牙出入せる平野の間を屈曲して木葉驛に達す。此間に、海岸に近く、伊倉の一邑あり。その南一里を隔て、小天に小天温泉あり。金峰火山中の一峯熊の岳の北麓に位し、西は海に瀕して風景明媚なり。木葉驛は人口二千四百餘を有し、南關街道の一驛を成せしもの、停車場を置きてより、其繁華昔に倍せり。驛の北に木の葉山峙立し、丘陵延びて南より北に亘る。其丘陵を街道の通過する所は、明治十年の役に激戦の巷として著名なる田原坂の險にして、木の葉驛より十町餘を距つ

山鹿町

るに過ぎず。今、坂頭松林の間に一基の紀念碑あり。總督有栖川宮の選文を刻す。聞説く當時兩軍の相對峙すること十有七日、其の血戦の狀は今尙ほ遊子の膽を寒からしむるものあり。これより線路は鹿本郡に入り、やがて植木驛に達す。植木町は停車場の北十町にありて、人口二千を有す。町は明治十年の役に賊軍の據りしところにして、今日猶處々に其の戦跡を存せり。町の西北、笠田村に杵築明神社あり。推古天皇時代の創建にして、縣下有数の古社なり。疫病除の神の稱四近に高く、賽客常に絶えず。
これより山鹿街道は北し、鹿本郡の中央部を縦斷し、三里半にして、郡の主邑山鹿町に達す。町は縣下北部第一の郡邑にして、人口六千餘を有し、街衢整正、人烟稠密なり。菊池川は町の南端を流れて、菊池玉石兩郡との運漕を便にし、附近村落より輸出する米穀及び木材は皆な一たび此地に集るが爲め、商業おのづから活氣を呈せり。且つ町には温泉湧出し、浴客常に絶えざるを以て、更に一層の繁華を加ふるを見る。温泉は硫黄泉にして、清潔なる浴場、宏壯なる旅館を有し、其設備は縣下に冠たり。浴客の數は一年十萬以

隈府町

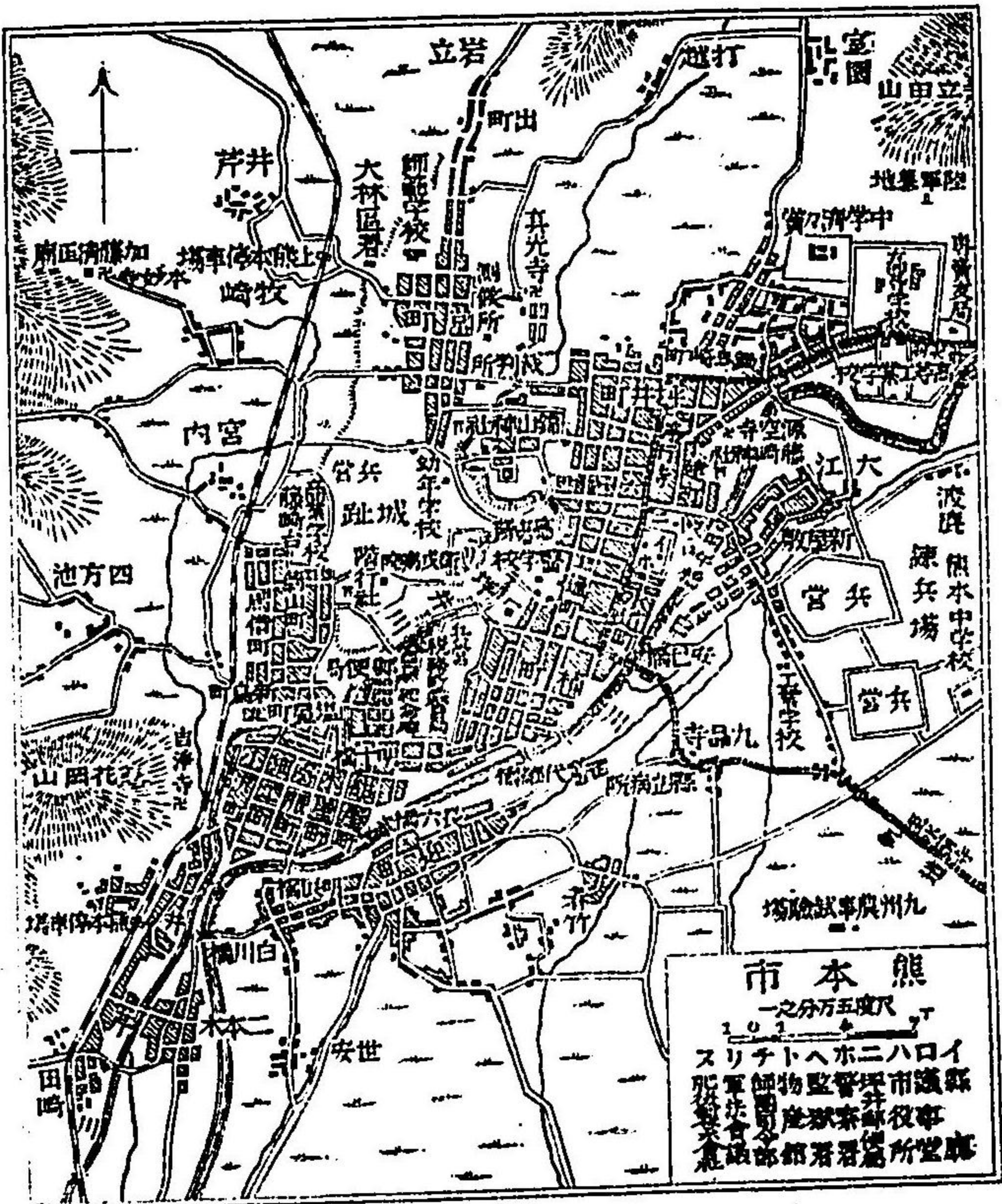
上に達すといふ。町に大宮大明神宮あり。一に山鹿神宮と稱し、其の構造頗る宏壯なり。夏期の大祭には、市民紙にて種々の形を成せる燈籠をつくり、これを軒頭にかゝぐ。山鹿の燈籠祭として著名なり。町の東一里を隔て、來民町あり。有名なる山鹿團扇の原産地にして、之を山鹿町に搬出して販賣す。町に鹿本中學校あり。三玉村大字蒲生に不動岩の勝あり。菊池の一郡は鹿本郡の東に位し、東方及び南方は山嶽重疊し、人烟稀少なり。郡の中心主邑を成せる隈府町は略、郡の中央に位し、道路はこれより四方に輻射す。此地方は鎮西の名族菊池氏が歴代勤王の軍を起せし所にして、其の遺蹟は今日猶所々に存せり。九州鐵道の植木驛よりすれば、四里にして町に至るを得べし。町は菊池迫間の二川を控へ、菊池平原の中央に位し、東西六町、南北五町、人口三千餘を有し、家屋櫛比、商業繁盛なり。菊池郡役所あり。菊池氏歴代の城址は町の東北にありて、高丘屹として平野に臨み、人をして當年を追想せしむるに足るものあり。中に別格官幣社菊池神社あり。南朝の忠臣武時を主神とし、武重武光武政武朝を配祀す。創立は明治三年七

熊本市

月にして、今の社格に進められたるは明治十一年一月なり。境内廣濶にして眺望に富み、眼下に菊池迫間二川の灌漑せる平野を展く。また、櫻樹を植ゑ、花時は來り賽するもの多し。正觀寺は菊池氏歴代の菩提寺にして、臨濟宗に屬し、城山の西數町にあり。菊池武光の墓あり。町の北、迫間川の上流に勢返深あり。再び九州鐵道線路に還れば、植木驛より汽車の線路は全く南し、頃刻にして、丘陵の間に挾れたる平野の中に瓦葺烟突の鱗次するを見るべし。これ即ち熊本市の市街なり。熊本市は縣の中央、熊本平野の中央に位し、西北は金峯火山の諸峯屹立し、白川坪井川の二川東北より來りて市の南部を貫流す。東西二十一町、南北三十五町、市坊の數百三十八、人口五萬七千を有す。本地方屈指の都會にして、市街の整正なる人烟の稠密たる、蓋し他に多く其比を見ず。市の沿革を尋ぬるに、此地は往昔より地方の一中心を成し、市街自から都邑の形を成したるが如く、他託郡春日村より白坪村田崎宮寺等にかけて既に府中の名を存した

りき。豊臣氏加藤清正を此地に封じてより、次第に繁華の趣を増し、今の熊本城を茶臼山に築き、府中の寺院商家を城下に移轉せしめ、始めて今の熊本市の基礎をつくれり。寛永九年細川忠利加藤氏に代りて以來、諸般の規模悉く整頓して益繁華に赴き、八十六の町と三十五の小路とを有し、藩士の邸宅と商賈の住宅とは劃然として區劃をつくり、よく雄藩の大市街たるの觀を備ふるに至りぬ。明治十年の亂、兵燹の爲めに、市街は全く焼燼せられ、「熊城元是好區寰、焦土蕭條人未還」の焼野原となり果てしが、爾來日を逐うて、家屋を増築し、街衢の兩側には樹木を並植し、現今は却つてその面目を一新したるの觀あり。市は北に筑後街道あり。東に阿蘇街道あり。南に鹿兒島街道、日向街道あり。鐵路は市の西部を南北に掠め、上熊本熊本の二停車場を置く。旅客先づ北より來りて此市に入るとせんに、汽車は先づ市の西北にあつる上熊本停車場を過ぎ、更に本邦屈指の古城址を有する丘陵と、花岡山及びそれに連る岡阜との間を走りて、市の南端なる熊本停車場に達すべし。停車場附近は市の郊外地にして、道路は白川橋を渡りて、直ちに迎町の一區に入

る。この區劃と紺屋町呉服町との間に、明辰橋長六橋の二橋を架す。長六橋附近に下河原公園あり。紺屋町米屋町呉服町細工町は縦街路を成し、瓦葺櫛比、頗る繁華の趣を成せり。この北方には井芹川の小溝疏通し、米屋町の北頭に明十橋あり。附近に郵便局稅務監督署等あり。鹽屋町新鳥町馬借町蔚山町は其の西北に連れる市街にして、其北角藤崎臺に近く、熊本商業學校あり。明十橋より北に進めば、廣濶たる地域その前に開け、熊本城の巍然として眼前に聳ゆるを見る。牙城は明治十年の兵燹に罹り、今は唯老樹鬱蒼たる石壘及び古城壁の巍然たるを望むのみなれど、垣々たる大道砥の如くこれに通じ、其規模の雄大なる人をして藤肥州の雄圖と十年役に於ける籠城とを想像せしむるに餘りあり。城内には、今、第六師團司令部歩兵第十一旅團司令部及び歩兵第十二聯隊の兵舎等あり。二の丸には、熊本衛戍病院陸軍幼年學校等あり。城北に錦山神社あり。加藤清正の靈を祀る。祠は初め本妙寺内にありしを、明治四年城内に移し、七年更に今の地に移せり。社地高燥にして眺望に富み、東は阿蘇の雲烟を望み、西は金峯の翠微に對し、坪井川を隔て、眼下



れより南北に通ずる道路は上通町及下通町にして、家屋櫛比し、商業繁盛な

に市の萬壘を瞰下す。賽客常に絶えず、京町は其西北に位して一區劃を成し、地方裁判所、測候所、師範學校、大林區署等は其附近にあり。測候所の東に、眞光寺あり。

更に明十橋に還り、これより東に進めば、桶町あり。監獄署はその西方にあり。こ

り。古町・新町には老舗大賈多く櫛をたらねたり。千反畑町附近は官衙相並び、縣廳議事堂、市役所等皆な宏壯なる建築なり。坪井町に淨行寺あり。藤崎神社は縣廳の北に位し、東に白川の流を帯び、地の風景に富むを以て名あり。朱雀天皇正平五年の創建にして、應神天皇を祀り、仲哀天皇、神功皇后を配祀す。今、縣社たり。此社は元市内宮内にありしが、十年の亂花岡山の賊壘より發射する砲彈を受けて燒燼し、戦後今の地をトして社殿を新築せり。大祭は毎年舊曆八月十一日より十五日までにして、祭儀の盛なる、賽者の多き、實に縣下第一と稱す。この北にある街路は、阿蘇街道の入口に即ち龍田口にして、龍田山の丘陵は鈍圓錐形を爲して道路の北邊に聳え、其の南麓に陸軍墓地及第五高等學校並に縣立中學濟々あり。白川は蜿蜒々として街路の南側を流れ、河に臨みて第五高等學校に面して熊本高等工業學校あり。龍田口より阿蘇街道の大江に至るまで輕便鐵道の便あり。新屋敷と稱する地は、白川の東岸に位し、明午橋を以て、建町と相接す。官吏會社員の居宅相接し、おのづから瀟洒閑雅の趣を成せり。其南に歩兵第

廿二聯隊の兵營あり。練兵場と相連る。其東に縣立熊本中學校あり。九品寺には縣立病院あり。坪井町より水道町を經、安巳橋を渡り、九品寺に至るの道路は、水前寺に至るものにして、安巳橋より水前寺に至る間は輕便鐵道を通ず。

市の近郊を記すれば、上熊本驛の西方花岡村に日蓮宗の巨剎本妙寺(第六十圖西)あり。京都日蓮宗本國寺の末寺にして、日眞上人の開基なり。加藤清正が此地に城くに際し、京都より移せしもの、慶長十九年、其子忠廣今の地に寺堂を建立し、爾來三百年の歲月を閱せり。域内に加藤清正の廟あり。春秋二期の彼岸には賽客遠きより至り、殆ど立錐の地なきに至る。其北方二三丘を隔て、大字柿原に臨濟の巨剎成道寺あり。金峯山の西腹に岩戸山あり。洞巖あるを以て世に知らる。西麓に鼓ヶ瀧あり。花岡山は市の西南に聳ゆる童山にして、眺望のすぐれたるを以て聞ゆ。山の中腹に維新の際王事に斃れしものを祀れる招魂社あり。十年の役、賊軍砲を此山に据ゑ、以て城内を亂射し、その銳鋒殆ど當るべからざるものありき。山の中腹に陸軍墓地あり。巔に至れ

は西南に祇園平と稱する平地あり。踞して西南有明海灣の風光を指點すべし。山の東麓横手村に北岡神社あり。朱雀天皇承平四年の勸請にして、もと花岡山上に鎮座せしを正保年間今の處に遷せり。この南二十町、白坪村蓮臺寺に淨土宗の名剎蓮臺寺あり。檜垣女の遺蹟を寺内に存せるを以て、一に檜垣寺といふ。境内にその汲みたりといふ檜垣の水あり。市の東南には水前寺の勝(第六十圖)あり。細川氏歴代の庭園にして、其名を成趣園と稱し、鎮西第一の名園と稱せらる。今開放して衆庶遊歡の地とす。されば此市に遊ぶものにして此處を訪はざるものなき亦宜なりと云ふべし。園内泉水の湧出するもの滾々として絶えず、其清冽豊富なる他に多く其比を見ず。従て林泉の美自から具はり假山起伏するの間青草氈の如く、所々に小亭を設けて客を待つ。その布置の妙なる、まことに其名に背かざるを見る。出水神社は歴代の藩主を祀れるところにして、その神殿は北隅や、高きところにあり。之に近く日露戰役に陣歿せる長岡公子騎馬の銅像あり。池水溢れて南に流れ、湛へて更に江津湖を成す。湖は周圍一里十五町、上江津下江津の二つに岐れ、其中間に江津

江津湖

橋と稱する一橋を架せり。若し夫れ一葉の扁舟に乘し流れに従つて湖上に至らんか、三伏の暑中尙秋の冷なるを覺ゆるものあり。されば夏時來り遊ぶもの陸續として絶えず。(圖甲乙十)

熊本市より東に向ふ一路は、阿蘇山地方に赴くものにして、白川の流域平野を東し、菊池郡の南端を掠め、坦々砥のごとく遙かに阿蘇の噴烟を指點す。街路上に大津町あり。人口四千八百三十を有し、宿驛的繁華を保てり。町に日吉三王社あり。正保三年の建立なり。龍田口より此處に至る五里の間輕便鐵路の便あり。これより白河の流に沿ひ、南に俵山北に鞍岳の支脈を帯び、其間次第に狭く、立野火口瀨に至りて南北二路に分る。北するものは黒川の流に沿ひて阿蘇火山の北部火口原なる阿蘇谷の地に入り、南するものは白川の流に従ひて南部火口原なる南郷谷に入る。而してこの兩火口原の間に阿蘇の火口丘巍然として崛起す。立野の東、道路の右數歩に、數鹿流瀑あり。一に銅提の瀑といひ、又須輕の瀑といふ。老樹鬱蒼、阿蘇熔岩の創立する處に一幅の水晶簾を掛け、萬雷一時に吼ゆるが如し。傳へ言ふ、昔阿蘇明神此處

宮地町

を割きて阿蘇湖を乾せし時、數多の鹿流れ落ちしが爲め瀑の名を得たりと。阿蘇の火口丘は縣の東北に位し、阿蘇郡の中央に崛起す。火口丘中、更に中央にありて山頂常に硫烟を吐くものを中岳と稱し、杵島岳・烏帽子岳・高岳、根小岳其の附近に並峙す。高岳最も高くして、海拔一五九二米を有せり。此等の諸岳、これを阿蘇五岳と稱し、これを圍繞せる連山は外輪山をなし、この火口丘と外輪山の間火口原たる阿蘇南郷の兩盆地は横はり、其規模の大なる、世多く其比を見ずといふ。(地形參照)立野より北に折れて阿蘇谷に入れば、路は黒川の谷を挟んで二つに岐れ、一はや、東南して内牧より郡の北部宮原に達し、一は阿蘇の北麓に沿ひて、宮地坂梨を経て大分縣に入る。宮地町は人口千五百を有し、阿蘇郡役所あり。町の南部に官幣中社阿蘇神社あり。二千年以來の古社にして、樓門宏壯、桓武時代の皇居の制に模して築造し、頗る古色に富めり。景行天皇の時、國速瓶玉の命の子惟人に命じ、祭祀の事を司しめしより、阿蘇大宮司の稱は歴史に散見し、南朝時代にありては、菊池氏と共に勸王の軍に參し、威名鎮西に赫々たりき。今の大宮司阿蘇男爵の

坂梨町

内牧町

宮原町

邸は、宮の附近にありて、邸内廣潤泉石の美あり。其藏する所珍重すべきもの多く、殊に古文書の如きは、歴史上幾多の新事實を提供せるもの尠なからずといふ。阿蘇登山者は宮地を経て、坊中より登り、湯の谷に下るを普通とす。登路また甚だ峻峻ならず。木屐にして猶ほ登山することを得べし。噴火口は南北の二方に廣くして中に狭く、其形恰も曲玉に似たり。孔内は絶壁削立し、僅かに西方の岩邊より孔底に下るを得べし。底の北部に大小の孔口あり。熱水を湛へ、硫氣濛々として昇る。眞に宇宙の壯觀を成せり。近年別に丘陵に一新火口を噴出せり。(地形参照)坂梨町は人口千二百を有し、竹田街道上にあり。これより二里餘にして、大分縣界に達す。黒川の北岸を走れる道路は立野より狩野を経て内牧に至る。内牧町は人口千餘を有する一邑にして、日田街道の宿驛を成し、猶北すること三里餘にして郡の北方宮原町に達す。阿蘇地方は温泉多く、朽木温泉湯の谷温泉地獄温泉杖立温泉あり。南郷谷は白川の流灌既し、道路は長野中松を経て吉田に至り、猶東して高森に達し、阿蘇の裾野を過ぐると三里にして、郡の東端津留の一邑に達す。

木山町

御舟町

高森の一邑、最も繁盛にして、人口千五百餘を有せり。高森より一路西南に岐れて、宮崎縣西臼杵郡に入る。此附近の地質は主として阿蘇火山噴出物を以て蔽ひ、土地概して礫確たるを免かれず。

熊本市より東南する道路は、所謂馬見原街道にして、飽託郡より上益城郡に入り、御船川に沿ひて御船町に達し、更に緑川に沿ひて甲佐原町を経て、郡の東部濱町に至り、それより猶東して、阿蘇郡の馬見原町に達し、宮崎縣の西臼杵郡に入る。熊本市より馬見原町に至る里程約十四五里なり。この道路中、飽託郡今村より岐れたる別路は、上益城郡木山町に達し、これより飯田山の西麓を経て、御船町に至りて本路に合す。木山町は人口二千六百餘を有する一邑にして、熊本市を距ること三里に過ぎず。町外迫村に木山彈正の古城址を有す。飯田山は船野山に相並びて平野の間に峙立し、標高二百五十米を有し、眺望のすぐれたるを以て開ゆ。御船町は市坊の數五、人口二千餘を有し、御船川の左岸にあり。郡中の一中心を成し、上益城郡役所は此地にあり。東部山嶽地方の交通の衝に當れるを以て、百貨輻湊し、人烟稠密なり。

甲佐町

濱町

里俗傳へ言ふ、景行天皇の肥前より來りたまひし時此岸に上陸したるを以て町名を得たりと。町に甲斐氏の城址あり。また尺神社、蛭子堂、相良塚等の勝あり。御船町より七瀧川に沿ひし道路は濱町に至るの別路を成し、七瀧村大字七瀧に七瀑の勝あり。瀑は道路の東南に入ること十町に位し、瀑上に辨才天の小祠あり。これを望めば瀑水奇岩に激して落下し、其の壯觀名狀すべからず。懸崖に縋りて瀧壺に下れば、瀑の七級を爲して瀉下するの狀を明かに望見するを得べし。故に之れを七級瀑と稱す。またこの附近は紅葉の勝に富めるを以て、秋日は來り遊ぶもの多し。蓋し縣下屈指の勝地なり。御船町より東方二里餘を距つ。濱町本街道を南すれば、御船町より一里にして甲佐町(岩下)あり。緑川の岸に位し、其繁華御船町に次ぐ。市坊三、人口四千三百余を有す。甲佐神社は宮内村大字上揚にある古社にして、今官幣中社たり。孝元天皇二十六年の創立にして、八井耳玉命をその主神とす。境内廣濶にして前に緑川の流を帯び、甚だ風致に富めり、其他神宮寺と稱する一古刹あり。濱町は甲佐町より四里、御船町より五里、山間の一名邑を成し、人口四千九

馬見原町

川尻町

隈庄町

十四を有せり。町の南端に千瀧の勝あり。河水急に落ちて無數の小瀑を成し、頗る奇觀なり。其東數町に通潤橋あり。馬見原町は濱町の東四里に位し、東部に於ける一小邑を成し、人口二千七百餘を有せり。この道路中、甲佐濱町間の原町よりは、津留川を溯り、雁俣岳を越えて、五箇庄に至るの道路を通ず。熊本市より南する九州幹線鐵路は、飽託郡の平野を走り、頃刻にして川尻驛に達す。川尻町は飽託郡の南部に位し、緑川の流、其南方を曲折して流る。町は鹿兒島街道の要驛たるを以て、古來頗る繁華の趣を有したりき。市坊の數十二、人口五千四百餘を有し、區裁判所郵便局等あり。明治十年の役、賊軍の本營を置き固守せし處なり。町の東數町を隔て、元三村大字野田に、禪宗の古刹大慈寺あり。往昔龜山天皇の勅願所にして、後鳥羽天皇第三の皇子寒巖和尚の開基にかゝり、諸國に末寺四十一ヶ所を有し、伽藍の美鎮西に冠たりしが、中世に至りて振はず、現今は加州吉祥山永平寺の末に列せられたり。されど風光佳絶にして、大慈寺十境の名あり。緑川は飽託下益城二郡の境をなし、川尻驛の東南一里餘に隈庄町あり。人口四千七百餘を有し、下

益城郡西部の一名邑をなせり。鐵路は愈南して宇土町に達し、これより宇土半島の北岸をめぐれる宇土三角間の鐵路を岐つ。

宇土半島は島原海灣と八代海の間に突出し、その絶端は天草諸島中の戸馳島・大矢野島と相接し、其間に三角瀬戸を作る。半島は大抵丘陵性の山岳を以て蔽はれ、南北の二路海岸を縫ひて、三角港に至りて合す。鐵路は主として北岸を縫ひ、其間に住吉・網田の二驛あり。此間、全く島原海灣に瀕し、海を隔て、温泉岳の秀容温然として前に横り、風景甚佳なり。住吉驛の北數町を隔て、海岸に住吉島あり。實は緑川の河口に堆積せる小砂丘にして、上に住吉神社を祀る。これ、後三條天皇の御宇延久三年菊池將監が勅を奉じて攝津住吉大神を分靈奉遷せしもの、殿堂古雅境内幽深、頗る風景に富めり。海上に風流島あり。歴代歌集に其詠多き著名なる島嶼なり。この前に横はれる筑紫海には有名なる不知火あり。毎年八月朔日の曉に於て、最も明かにこれを見るを得ると稱するを以て、高良下松附近の丘陵に上りてこれを見るもの少なからず。網田驛附近には、海水浴場あり。鐵道の終點を際崎驛と云ひ、

三角港

其西方小丘を隔て十數町にして三角港の市街あり。港(第六十圖)は半島の西角に位し、長崎・天草方面に航行する船舶の發着所として、且つ有明海と八代海とを連絡する要地として、汽船和船の來り碇泊するもの常に群を成し、汽笛の音日夜海波に響けり。此の地は三十年前にありては、荒涼寂寞たる一漁村たりしが、海運の便盛なるに至りて、漸次に繁榮を來し、宇土三角間の鐵道の開通は、更に肥後南部の荷物旅客を此處に集むるに至れり。今、開港場となり人口三千七百を有せり。港に對して聳立せる尤然たる島は、天草郡に屬する大矢野島なり。此の港を發着點とせる航路は三角米の津島原間、三角茂木間、三角牛深間、三角長崎間等あり。毎日相互に發着して、以て交通の便に供せり。

宇土半島の南岸を縫へる路は、九州鐵道幹線松橋驛より東方に通ずるものにして、概して魚蟹の地なれど、風景のすぐれたる處多し。松合郡浦波太等の諸邑この道路上に位置す。

宇土町は宇土半島の頸部に位し、市場の數十五、人口五千六百餘を有し、

宇土町

五箇の庄

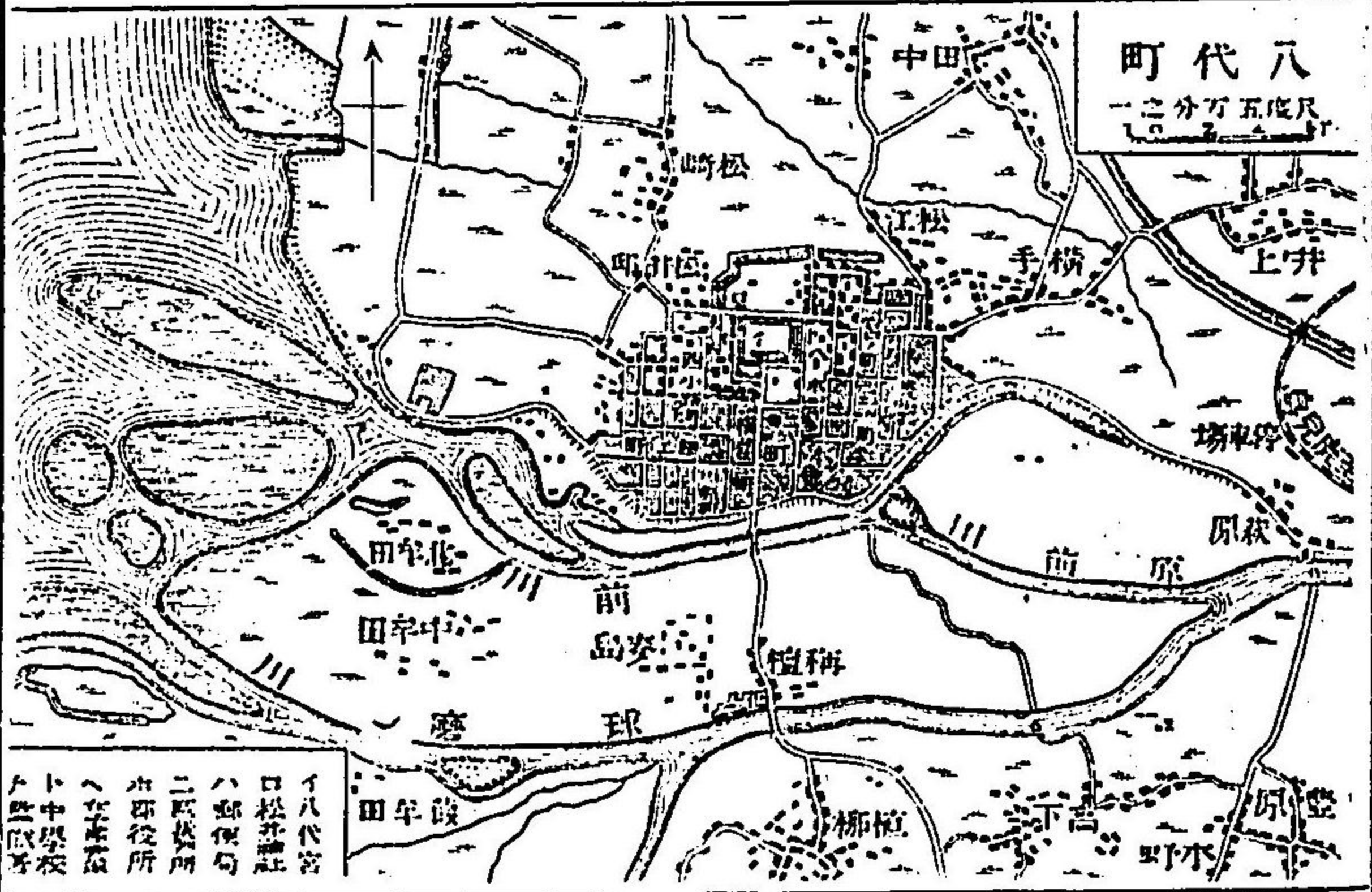
郡中の名邑たり。地に區裁判所郵便局あり。此地は豊臣秀吉が島津氏を征服せし後、小西行長に分賜せしところにして、熊本と共に本道の二要鎮たりき。町に今猶ほ小西行長の古城址を存す。郡浦村字馬場に三宮大明神宮あり。元明天皇和銅六年の創建なり。地方の大社として世に聞えたり。不知火村大字小會部に能因法師の墓あり。九州鐵道幹線の次驛は松橋驛なり。松橋町は大野川の川口に近く、これより鹿兒島米の津に向ひて發する汽船の便あり。人口二千七百餘を有す。鐵路はこれより鹿兒島街道と略並行して南に向ひ、小川有佐の二驛を経て八代町に達す。鹿兒島街道上には小川宮原の二宿驛あり。宮原より氷川の上流に遡れば、柿迫の一村あり。地に釋迦院あり。眞言の巨刹にして、昔時は寺院七十餘坊谷を埋め山に架して、九州の高野山と稱せらるゝほどなりしが、小西行長一たび郡中の寺院を焼きしより、一時全く斷滅に及べり。今は纔かに一字の堂宇を有するに過ぎず。

五箇の庄は八代郡の東部に位し、全く深山の中にありて、柿迫村よりも至ることを得れども、下益城郡、球磨郡より津留川川邊川を遡りて至るを普通

八代町

とす。地は川邊川の上流樅木川の沿岸に位し、仁尾田椎原樅木葉木久連木の五集落より成り、四面全く高峯峻嶺を以てこれを圍み、風俗また從ひて他と異り、おのづから山中の別天地を成す。傳説によれば、元暦元年三月平惟盛同清經の紀州熊野より遁れ來り、子孫連綿此處に住し、世間と交通を絶ち、以て今に至れりといふ。山中小松を姓とせるもの多し。戸數二百、人口九百八十餘を有し、霧厚く、雲深く、殆ど太古の趣を成せり。地、礫礫にして米を産せざるを以て、住民は小豆稗を以て常食と爲し、衣服は常に木綿の類を用ひ、荷物の運搬は牛馬を用ひず皆人肩に倚れり。近來、稍交通の便開け、村内小學校の設備を見るに至れり。

八代町は八代郡の略中央に位し、西に八代海を控へ、球磨の長流はその南を流れて海に入れり。球磨地方、鹿兒島地方より搬出する荷物の重要なる運輸に當り、且つ海上交通の便を占むるを以て、縣下南部に於ける重要なる市邑を成し、街衢整正、人烟稠密なり。市坊の數二十六、東西十三町南北七町、人口一萬餘を有し、郡役所區裁判所郵便局等皆な此地にあり。地は球磨



川より運輸し來れる木材及び荷物を收容し且つ集散する樞要の地にして、一種港市としての繁華を呈し、巨大なる製材所あり。又セメント會社あり。九州鐵道の停車場は町を東に十四五町を隔てたる萩原に置き、汽車はこれより東南して球摩川の峡谷に入れり。町の略中央に八代城址あり。元和六年加藤忠廣の其臣加藤正方をして築かしめし所にして、其後細川氏の支領に歸し、其臣長岡氏世々此處に居れり。明治十三年征西將軍懷良親王後征西將軍良成親王を此地に祀り、八代宮と稱し、其の牙城の址に壯麗なる宮祠を建てたり。社格官幣中社たり。城濠には

蓮花を植ゑ、夏時は頗る美觀を呈せり。町の西方横手に明治十年の役に戦死せる官軍の改修墓地あり。此地は土地低濕なるを以て、球摩川の氾濫夥しく、人民其害を被るもの多きが爲め、古來堤防修築を加ふるもの數次、其長堤は古麓村の山際林鹿庵附近より蜿蜒として河口に至り、その長さ大凡二里餘と稱す。堤上松樹を駢植し、處々に山櫻樹を交ふ。花時は來り觀るもの多し。高田村大字豊原に遙拜堰あり。球摩川を引きたる大堰にして、南を高田漕、北を太田漕といふ。水口斗門ありて、啓閉自在なり。俗にこれを御手械といふ。南岸に朱雀天皇の天慶三年八代郡主の阿蘇宮を勸請し阿蘇の噴烟を望みて遙拜せしといふ遙拜神社あり。堰の名これより起れり。東一里を隔て、宮地村に曹洞宗の巨利悟真寺あり。村の東南方の岡陵上に位し、延文年間征西將軍宮の建設するところと稱す。寺畔中宮谷に、征西將軍懷良親王の御墓あり。一にこれを麓の陵といふ。親王は後醍醐天皇第九の皇子にして、菊池武の請によりて九州に下向し、延元四年三月八代に入り、元中五年三月を以て八代古麓の城に薨じ、後此處に葬る。老樹鬱蒼として墓塋を繞り、賽者をし

て南朝の末路を憑吊するの情に堪へざらしむ。また地に八代神社あり。上宮は宮地村檜嶽に、中宮は宮地村の奥に、下宮は宮地本村にあり。後鳥羽天皇文治二年創建の古社にして、賽客常に多く、祭日には境内殆ど立錐の地なきに至るといふ。

汽車は八代驛より鹿兒島街道に岐れ、球摩川の峡谷を縫ひ、坂本瀬戸石白石の諸驛を経て球摩郡に入り、更に一勝地、渡の二驛を経て、郡の中心市邑を成せる人吉町に達す。此間は所謂風景絶勝の稱ある球摩川にして、旅客は兩山相仄せるの間、處々に急瀬の奔騰するを見るべし。鎗倒は相良侯の江戸参勤の時、舟の此處を通過するに際し、行列の鎗を倒すにあらずんば通過する能はざるより起れる名にして、岩石高く川に向つて聳え、崖下急湍激越、舟師意を用ゐざれば、往々にして覆没の憂を免かれずといふ。清正公岩は其上流西岸にあり。巨岩屹として聳立し、溪流これに激し、壯觀比すべきなし。加藤清正嘗て球磨を征せんとして此處に來り、天險の攻むべからざるを知り、遂に望を絶ち去りしより、岩は其名を得たりと傳ふ。今岩頂に清正公の小祠

を安んず。白石驛の對岸神瀬に鐘乳洞あり。白石より一勝地に至る間は、溪山殊に色を生じ、急瀬奔湍、眞に人をして天下この奇景ありやと嘆稱せしむるの趣あり。一勝地には一勝地製材處あり。球摩川兩岸數里に亘れる山林を監督し、兼ねて伐木運搬の事業を經營す。汽車開通以前にありては、球摩の山中よりする交通は、一にかゝりてこの水路に由りしを以て、舟筏の往來は頗る盛に、上下の川舟は到る處の村落に寄港し、一種河港の如き繁盛を保てる集落少なからざりしも、今は全く廢せり。汽車の線路は瀬戸石白石間渡人吉間に於て二たび川を渡れり。(第三十圖甲)

人吉町

人吉町は玖摩郡中央の谷盆地に位し、球摩川、町の中央を流れ、四面悉く山岳を以て圍繞す。地勢の要害無比なるは、戰國時代にありても、相良氏此天險を擁して一度も外部より指を染むるを得ざらしめしを見て、これを知るべし。市坊の數十九、人口四千五百を有し、郡役所區裁判所等あり。町は附近山地の一中心を成し、荷物の集散甚だ多し。此地は明治十年の役、賊軍が本營を置きしところとして著名なり。町に相良氏の故城址あり。青井大明神

日奈久町

は平城天皇の大同二年の創建にして、肥後阿蘇神社と其の神體を同うす。境内廣濶にして庭池には蓮花を植ゑ、頗る佳麗なり。櫻馬場は櫻花を以て附近に開ゆ。此地は良好なる焼酎を産し、球摩焼酎の名頗る高し。これより東方に至る道路あり。これ球摩川の流に沿ひて郡の東部に通ずるものにして、其の道路上に水上深田・多良木等の諸邑あり。川邊川の溪谷は雲厚く溪邃く、人烟稀少にして、處によりては太古の遺風を存するもの尠しとせず。鐵路は略日向街道に沿ひて南し、大畑驛に至る。これより汽車はループ式隧道をつくりて山路にかゝり、紆餘屈曲して山上なる矢嶽驛に達す。加久藤越はこの線路のや、東に位し、宮崎縣に達する樞要なる山路を成せしも、鐵道開通以後は全く閑却せらるゝに至れり。鹿兒島街道は八代町より南し、海岸を過ぎ直ちに葦北郡の日奈久町(第六十圖乙)に達す。町は人口三千七百餘を有し、前に海に臨み、後に山を負ひ、風光甚だ佳なり。地に温泉を湧出す。炭酸泉にして、澡浴の設備略全く、縣下著名の温泉地なり。且つ此地は景行天皇筑紫巡狩の時發船せられしところなりと

佐敷

水俣

傳ふ。道路はこれより徒崖の間を縫ひ、野阪の里を以て著名なる田浦を過ぎ、佐敷の一邑に達す。途に三太郎の險ありしも道路改修せられ交通甚便なり。佐敷は人口九千を有し、地に葦北郡役所あり。佐敷城址は建武年來の古城址にして、戰國時代にありては、島津氏・相良氏互に攻略してこの城を有せり。これより東して球摩川沿岸の白石村に出るの山路あり。水俣の一邑は水俣川の河口に位し、人口一萬六千五百餘を有し、市街稍繁榮なり。且、港灣良好なるを以て、船舶常に群を成せり。これより道路は二つに岐れ、一は海岸を傳ひて、鹿兒島米の津に至り、一は東南して、水俣川の谷に沿ひ、三里にして、鹿兒島縣伊佐郡に入る。

天草郡は大矢野島・上島・下島・御所浦島・千束誠々島・樋島・湯島等より成り、面積五十方里を有し、その最も大なるものを下島と爲す。下島は周圍七十六里、北は早崎海峡を隔て、肥前の島原と相對し、南は薩摩の長島に隣れり。上島は周圍三十五里、本渡瀬戸を以て下島と相接す。大矢野島は柳の瀬戸を夾みて、上島の東北に連り、周圍十五里、其東端は三角海峡を隔て、宇土郡と相

對す。上古はこれ等の群島を天草の國と稱し、葦北の國、阿蘇の國と共に各一國を成したりき。一郡となりて肥後國に屬せしは推古天皇の御宇にあり。天正の頃、五人の豪族ありしが後加藤清正小西行長の爲めに滅されたり。關原役の後、加藤清正の領地となりしも、數年ならずして肥前唐津城寺澤廣高の領に歸せり。此地方は小西行長の感化を受けて、南蠻寺の設立多く、天主敎を奉ずるもの尠からざりしが、寛永十四年に至りて天草一揆の亂あり。亂平きて後、徳川幕府の直接に歸し、富岡に代官所を置き、以て王政維新に及べり。島中主なる市邑は、下島に本渡町、富岡町あり。宇土半島の三角港よりする航路は、島の北部を廻航するものと、南部を廻航するものとの二あり。前者は三角、茂木線にして、上島の赤崎、大島子を経て下島の東部町山口を經、御領、免池、二紅、板瀬川、上津深紅、志岐等に寄港して富岡に達し、以て茂木に至る。後者は上島の大島、姫浦、志戸、池の浦、棚底、宮田、栖本、大門を經、下島の大多尾に達し、中田、上平、深海の沿岸各地に寄港して南部の一邑牛深町に達す。これを際崎牛深線といふ。富岡町は下島の北

部に位し、人口四千を有する名邑にして、船舶の出入甚だ盛なり。地勢小半島をなし一條の砂洲によりて緩かに下島の志岐村に連り、東に富岡灣を擁す。洲上青松一帶遠く連り其東側灣に面して港市あり。西角に古城址あり。老樹鬱蒼として、頗る形勝の趣を爲す。志岐村に國造寺あり。郡中第一の古刹と稱せらる。下島を南北に縦貫する道路は富岡町より二江まで海岸に沿ひ、これより江川の谷に溯りて内地に入り、再び島の東岸の一邑町山口に出で、これより再び内地に入り、丘陵の間を南すること七八里、島の北端牛深町に達す。町は人口四千を有し、北部の一名邑を成せり。三角と此地とを往復する汽船の來往頻繁なり。

宮崎縣

宮崎縣は本地方の東南に位し、東は太平洋に面し、西は熊本縣及鹿兒島縣に接し、西南は鹿兒島縣に境し、南は有明灣に臨み、北は全く大分縣に連る。縣廳を宮崎町に置き、日向國一國を管す。郡を分つこと八、宮崎南那珂兒湯

宮崎縣

人口

北諸縣東諸縣西諸縣東臼杵西臼杵即ち是なり。東西十七里、南北四十里、面積四八七三四方里七五一六四七方寸人口五四一七七二(二方里一一二一人)にして各郡中面積の最も大なるものは東臼杵郡と爲し、一一五方里二〇を有し、これに次ぐものは、西臼杵郡の九〇方里一七、兒湯郡の七五方里四五と爲す。最も小なるは東諸縣郡にして、面積二五方里四四を有するに過ぎず。人口の密度は北諸縣郡の一七〇〇人餘を最多となし、南那珂郡の一三〇〇人、東諸縣郡の一三〇〇人、並に東臼杵郡の九八〇人これに次ぐ。最も小なるは北部西部の山岳地方にして、兒湯郡は八百人、西臼杵郡は五百人を有するに過ぎず。

地勢

地勢は縣の北部より西部に延びて九州山系一帯に連亘し、之に加ふるに縣の西北隅は、阿蘇火山の裾野と接觸し、該火山より流れたる熔岩は延びて長く本縣に來れるものあり。斯く本縣の大部分は山嶽重疊して、平地の稍見るべきものは唯これ等の山地の東南の邊緣をなし、海岸に沿うて連亘せる一帯の臺地と、山地より出で、此等の臺地の間を穿ち東流せる諸川の沿岸に横は

産業

るに過ぎずして、都邑村落此間に發達し、延岡美々津都農高鍋佐土原等の諸邑あり。縣の主腦宮崎町のある處は、東部海岸平野の南端に位し、大淀川の下流にあり。大淀川以南には鰐ヶ塚山脈蜿蜒し、全く山地を成し、縣の南端有明灣に至りて盡く。この山地の間海岸に近く平地を成せる處には又佻肥油津等の市邑を開くあり。鰐ヶ塚山脈と霧島火山との間には、都城盆地ありて、縣下第二の都會たる都城町此地に發達し、宮崎町より鹿兒島縣に通ずる要衝を成し、交通頻繁、人烟稠密なり。この北方、霧島火山の東麓は、高原性を成し、宮崎町より高岡町を経て、加久藤越に達する道路東より西に通じ、市邑の繁華を呈せるもの尠なからず。

縣下の産業は農業林業水産を主とし、工業鑛業これに次ぐ。農業は米穀及び麻を主とすれども、畜産また頗る盛にして、産馬地としては、鹿兒島縣と共に、本地方に冠たりと稱せられ、九州唯一の軍馬補充部支部高鍋附近にあり。水産は東部沿岸七十餘里、暖流この沖合を過ぐるを以て、洋性魚族の産少なからず。自から沖漁業行はる、其の主要なる魚類は、鰻、鯉、鮪、鱈、鰯、鰯、鰯等

にして、中にも鱒及び鯉の漁獲に名あり。林業は南那珂郡東西白杵郡を主産地となし、扁柏・杉・樟・榿・白楊等の美なるもの多く、造林の經營また頗るに見るに堪へたるものあり。工業は製絲業最も盛にして、南部東部の市邑これに従事せるもの多し。殊に都城・高鍋・廣瀬附近に於て最もその盛なるを見る。製紙業はこれに次ぎて縣下主要なる産業を成し、主として美濃半紙・塵紙を製し、東白杵郡・兒湯郡・南那珂郡・北諸縣郡を主産地となす。鑛業は多く言ふに足らざれど、東白杵郡に日平銅山あり。西白杵郡に安質母尼銅を産する槇峯鑛山あり。

交通

縣下の交通を記せんに、鐵道は僅かに鹿兒島線が縣の西隅矢嶽の險を掠むるあるに過ぎずして、未だ縣下の交通に資するものあるを見ず。唯近き將來に於て宮崎と鹿兒島線上の吉松驛との連絡を見んとするものあるのみ、されば現今縣下の行旅は主として馬車を用ゐて、交通の便に供せり。乗合馬車の制は殊に完全にして、國道縣道を旅行するものは、敢て多くの不便を感ぜざるべし。主要なる道路は宮崎町を起點とし、田野山の口を経て都城に達し、

これより鹿兒島縣國分に出て、鐵道鹿兒島線に達するものを鹿兒島街道となし、縣中に於ける最も主要なる交通路を成せり。齊しく西方に向ふものは、宮崎より大淀川の流に添ひ、高岡野尻小林の諸邑を経て、加久藤より肥後に入るの道路あり。往昔より肥後街道として聞えたれど、現今は九州鐵道の幹線路開通し、加久藤の西一里吉松に一驛を置きたるを以て、熊本鹿兒島等に往復する旅客にして、此道路に由るもの多く、車馬の往來頗る頻繁なり。縣の南部に赴く道路は、宮崎より新町・九平を経て、有明灣頭の一邑今町に達し、これより鹿兒島縣の志布志町に達す。宮崎町より縣の北部に向へるものは、一路海岸に近く北を指し、高鍋郡農美々津・富高・新町・土々呂・延岡を経て大分縣に達す。この道路中延岡より西に岐れて三田井より熊本縣の馬見原町に至るものを熊本街道と爲す。其他米良地方より肥後球磨地方に赴くもの、三田井地方より大分縣竹田地方に赴くもの等あり。水運には大阪内海間の定期汽船あり。大分縣の海岸諸港に寄港し、本縣下に來りては延岡・土々呂・細島の諸港を経て

内海港

内海港に達す。内海は宮崎町を距ること遠からずして縣の咽喉をなせり。其他大阪鹿兒島間の定期汽船の細島油津港に寄港するものあり。

吾人先づ大阪内海間の汽船に搭して、日向灘を駛り、内海港に上陸し、漸次縣下を巡遊すること、せん。内海港は宮崎町の東南五里餘に位し、地形全く大洋に暴露し、風浪の日に於ける安全なる港にあらざれども、平滑なる日向海岸に於て、比較的中央部に近接し、稍々港灣の趣を爲せるは此地を措きて他に求むる能はざるを以て、今は東海岸中最も重要な港となれり。埠頭に近く、汽船發著所運漕店等軒を並べたり。市街や、新開地の趣きを呈せるは、明治三十四年の火災未だ其舊觀を復する能はざるが爲めなり。今、戸數七百人口三千二百を有せり。これより道路は海岸と丘陵との間を行き、一里餘にして折生迫の一邑に至る。戸崎鼻右に長く、青島の一青螺盤のごとく蒼波の上に浮び、風光まことに描くが如し。邑の街衢おのづから漁市の趣を呈し、鯉鯽鮑の漁業地として、頗る活氣を帯べるを見る。海岸一帯弓弦の状を成せる地に、海水浴場あり。夏時は遊客踵至す。青島は海中七八町の處に横はれ

青島

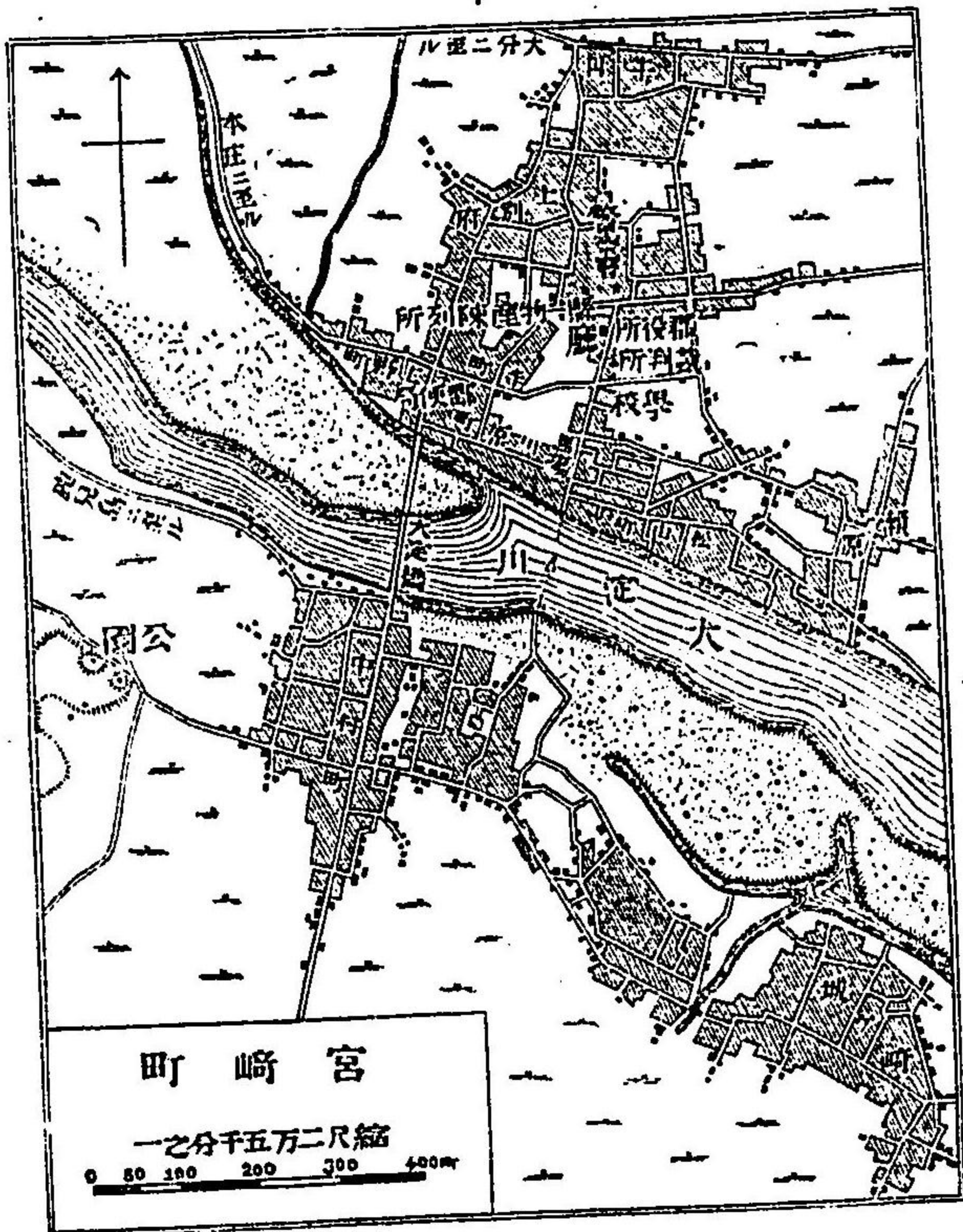
る繪のごとき小島嶼にして、干潮の時は一帶の沙路相通じ、歩いて以て涉るべし。島、周圍十二町、熱帯性の植物叢生し、ことに蒲葵樹多きを以て頗る世に聞え、一名蒲葵島の名稱を得るに至る。其他、油桐蘆竹はまゆふ等温帯地方に見るべからざる植物全島に繁茂す。島中に青島神社あり。彦火々出見尊豊玉姫命を祀る。華表の側に一井あり。玉の井と名づく。海中の島嶼に湧出して、しかも些の鹹味を含まざるは一奇とすべし。

これより北すれば、加江田川と清武川と相合するの邊、卑湿地を成し、道路は其西を過ぎて木崎の一邑に達し、益々北して赤江に達す。字田吉に寛永中清武八箇村の田地を開拓し、且つ清武川開鑿の偉功を樹てたる佻肥藩士松井儀長の頌徳碑あり。これより城ヶ崎を経れば、縣の主腦たる宮崎町は大淀川を隔て既に目睫の間にあり。

宮崎町は縣の東部中央に位し、大淀川その南部を貫流し、清武臺の丘陵は其南をめぐる、西方數里を隔て、日向山脈の翠微を見る。地勢平坦にして、一條の大路南より北に通ず。東西十町南北八町市坊の數十二人口一萬三千餘

宮崎町

を有す。此地は三十年以前にありては、今の上野町川原町松山町に僅々十數



商家次第に軒をつらね、瓦葺茅茨戸々相接し、坦路直ちに大淀川の畔に至る。

川に架したる長橋を橋橋(第六十)と稱し、長さ二百二十間、前に宮崎町本市街の瓦葺を望み、西方遙に霧島火山の高く聳ゆるを指點し、風光おのづから他に異れり。中村町の西に天神山あり。今、開いて町の公園となせり。橋橋を渡れば、横街路を川原町といひ、縦街路を上野町といふ。上野町は町内最も繁華なる街路にして、老舗巨商軒を並べ葺を列ね、郵便局其一角にあり。町に小戸神社あり。景行天皇の御宇に創建せられし古社にして、往昔は神輿河原の中の瀬に幸し、其祭典頗る見るに堪へたるものありといふ。寺町の横街路を北に貫きて進めば、數箇の宏壯なる洋館の處々に立てるを見るべし。これ即ち縣廳及び物産陳列所にして、其東に隣りて地方裁判所郡役所等あり。圖書館高等女學校小林區署稅務署皆なその附近にあり。物産陳列所のある地は公園式の廣場を成し、夏の夜は市民群集し、頗る雜沓を極む。上別府に眞宗の巨利安樂寺あり。寺の中庭に巨岩あるを以て聞ゆ。その附近に八幡神社あり。境内老樹鬱蒼として晝猶は暗し。明治十年の亂、西郷隆盛肥後各地に戦ひて利あらず、退いて此地に來り、本營を宮崎廣島に置く。官軍來りてこ

赤江港

れを攻む。清武臺中野臺の防備皆敗れ、遂に此地をも撤退せざるべからざるに至る。其本營の跡、今上別府宇松橋に存し、當年の彈痕歴々として指點すべし。町の東方一里大淀川の河口に赤江港あり。港口狭く、波浪高くして、船舶の出入に便ならざれども、沿岸他に良港少なきを以て、船舶常に來りて碇泊し、帆檣林立す。

宮崎宮

宮崎町より北すれば、一路坦にして海岸に近き平地の間に通じ、高鍋都農美々津延岡を経て大分縣及び熊本縣に達する道路を起す。之に沿ひ西に偏し、町の北部に縣立師範學校中學校あり。又町の北半里にして、官幣大社宮崎宮あり。其一の華表は街道上よりもこれを見るを得べし。宮は神武天皇と其御父鵜草葺不合尊とを合祀し、天皇東征の後、其子神八井耳命の子建磐立命の九州の總鎮守たりし時、此地に來り、舊都の跡に就きて社を創建せしを始めとし、崇神天皇景行天皇應仁天皇の朝に於て屢々宮殿建營のことありしこと舊記に見えたり。其後、歴代の國守地頭皆なこれを崇敬し、明治に至りて、神武天皇社と稱せしを改めて宮崎神社と稱し、八年八月國幣大社に進み、十

宮崎古城址

一年五月宮崎宮を改稱し、十八年四月官幣大社に昇格し、三十二年新に社殿を造營せり。社前に立てる官幣大社宮崎宮の石標を見、華表を入りて、人家蕭疎たる間を置き、老樹鬱蒼たる社の境内に入れば、正殿は四方に高欄を透らし、前に渡殿を隔て、幣殿あり。其横に神饌所あり。幣殿の階前更に拜殿あり。構造すべて上代の建築を旨とし、清楚にして壯嚴、人をしておのづから襟を正さしむ。蓋し縣下第一の大社なり。北大宮村奈古山上に奈古山陵あり。東西六間南北三十間を有する古陵にして、其東麓に又神武天皇を祀れる奈古神社あり。同村北方には、神武天皇經營塚と稱するものあり。宮崎宮の西北約十町に位し、北に岡山の高阜を負ひ、西は遙かに双石、鰐塚の連山を望み、土地高燥、上に小祠あり。稱して天皇が東征前に都し給ひしところといふ。今、宮崎宮の攝社たり。此附近前方後圓の陵式を具へたる古墳多し。附近に一古城址あり。群岡の上に挺立し、高さ二十丈、岡頂分れて七區となる。延元年間南朝の將圖師入道慈圓の據りて以て北朝の將士と戦ひしところ、後國守伊東氏の有に歸し、慶長十九年に至りて廢せり。其南に天窟戸と稱す

廣瀬

る岩窟あり。中に天窟戸神社を祀り。爪生野には平景清の古碕と稱するものあり。池内には國守高橋種統の家臣權藤種盛父子の墓あり。下北に曹洞宗の古刹帝釋寺あり。國道は花ヶ島より新名爪に至りて、佐土原に達する一路を分ち、稍々海岸に近く、島の内を経て廣瀬に達す。宮崎町の東方海岸より新別府を経て此附近に至る間を一葉ノ濱と稱し、白沙青松遠く相連り、風光真に一幅の畫圖を展けたるに似たり。これを以て宮崎町附近より來り遊ぶもの多く、宮崎附近第一の勝地と稱せらる。松林中に一葉神社あり。宇鹽路に住吉神社あり。松樹林を成す。廣瀬は島津氏が佐土原の治所を移せし地にして、人口五千を有し、人烟稠密なり。地に廣瀬神社、蓮光寺あり。久峰觀音は邑の西北にある丘阜の上に位し、眺曠の佳なるを以て聞ゆ。邑の北方一里、一の瀬川の河口に福島港あり。佐土原町の前港を成し、木材米穀の此港より輸出するもの多く、戸數次第に増加し、漸く此附近に於ける商業交通の一小中心を成さんとせり。佐土原町は一の瀬川と河原江川との合湊點に位し、宮崎町を北に距ること四里、福島港を西に距ること一里、維新前は日向舊四藩

佐土原町

都於郡

中の舊城下として、その繁華附近に冠たりしも、島津氏治所を廣瀬に移せしより、漸次衰退し、今は地方の一商業地として多少の繁華を保てるのみ。人口四千を有す。地に城址あり。初めは鎌倉時代の創築にかゝり、延元年間、伊東祐持これを擴張し、慶長八年島津左馬助行久こゝに居るに及び、山上の城壘を毀ちて山下に移し、規模を狭くして改築し、子孫連綿以て明治維新に至れり。町の附近に巨田神社・愛宕神社・大光寺等あり。

佐土原より西部の地は、右に一の瀬川流れ、中央に荒武川流れ、其間に丘陵沃野交錯し、道路縱横に通ずるを見る。主なる道路上には都於郡、右松、妻等の諸邑あり。都於郡には建久年間工藤祐經の築きし都於郡城址あり。黒貫寺は花山院天皇の御宇隆元僧都の創立せる處にして、縣下最古の寺として著名なり。岩爪神社は大樟樹を以て世に聞ゆ。鹿野田に潮神社・荒武に御彦宮あり。伊東義益の墓は都於郡の東南舊内光院址畦圃の中にあり。三納には初瀬觀音あり。峰險ならざれども谷深く、奇石重疊、溪水潺湲、おのづから一別區を成せり。元正天皇の養老年間僧德道の其地形の大和の長谷觀音に似た

高鍋町

るを以て、一寺を創立せしものにして、今、木造の十一面観音を安置す。養客常に踵至す。其他地に古城址あり。妻の一邑は下穂北村に属し、兒湯郡西部の小市街を成し、米良山中の物産は多くこの地を経て海岸地方に出づ。宮崎町より六里三十町を距つ。地に日向式内四座の一なる縣社都萬神社あり。此附近古陵多く、其數殆ど數ふに暇あらず。就中下穂北村字三宅にある二山陵最も著名なり。今、御陵墓參考地たり。これより以西は多くは皆々山村僻地、米良山中に至るの山路崎嶇として長く通ず。

國道は一ッ瀬川を渡り、三納戸、下長谷を経て、直ちに兒湯郡の主邑高鍋町に達す。兒湯郡は縣下の大郡なれど、西北の大部分は山嶺重疊し、多くは山村僻地にして、唯東南の海岸地方に比較的少許の沃野を開けるのみ。高鍋町は郡の東南海岸地方に位し、秋月氏歴代居城の地たりしところ、戸數千百餘人口六千七百を有せり。地に郡役所、稅務署、區裁判所出張所、郡立農學校、高鍋製絲會社等あり。城址は町の西高阜の上に位し、始めは土持氏これに據り、中ごろ伊東氏に歸し、天正年間に至りて島津氏の有するところなりしが、徳

蚊の浦

川氏に及び、秋月氏累世これに居り、以て維新の廢城に及べり。今、開いて公園となす。市街の西三町餘、老樟多く、地區廣濶にして、西北は日向山脈を顧み、東南は太平洋を望み、風光甚だ佳なり。境内に招魂社、丁丑役戰歿諸士記念碑、二十七八年及び三十七八年戰役記念碑等あり。舞鶴神社は同藩主の祖先を祀れるものにして、附近櫻楓を栽植し、春秋の候は來り遊ぶもの多し。此地は縣下屈指の養蠶製絲産地たるを以て、旅客は街頭到る處繰車の音を聞くべし。町の東十二三町を隔て、蚊の浦の一港あり。大九川の河口に位し、港口は東に向ひ、和船の小碇泊場を成せり。路傍に彈琴松あり。繞らすに石柵を以てし、中に一基の石碑を建てたり。高鍋町の北方、大九川の對岸は臺地を成し、其上流一里に一支道の中心を成せる高城の一邑あり。人口千餘を有す。地に高城々址あり、島津氏が大友氏の軍を撃退せし古蹟として著名なり、今日猶ほ其地形の要害を占めたるを見るべし。この附近に軍馬補充部支部あり。

高鍋町より大九川北岸の臺地を経て北に向へば、地は一帶廣漠たる原野を

都農

成し、並木松の間處々に寂寥を極めたる村落を散點す。川南はその一邑たり。地に天長二年創建の古社多賀神社あり。唐瀬原は國道の西に位し、東西一里、南北一里半、地勢平坦、茅草深くこれに生し、處々に土人の開墾したる甘藷畑蕎麥畑を認むるのみ。これより名貫川を渡り、川北を過ぎ、都農の一邑に達す。邑は國道線路中の一宿驛を成し、瓦葺茅茨相連り、人口二千を有せり。町の北端に縣下著名の古社なる都農神社あり。國幣小社にして、日向式内四座の一に位す。創建は頗る古く仁明天皇紀清和天皇紀延喜式神名帳にも其名を見る。往古は其社宇頗る宏壯なりしも、大友島津の兵燹にかゝりて燒燼し、一時荒涼たる趣を呈したりしことは、延寶三年橘三喜の一宮巡詣記に明かなり。爾來領主秋月氏の崇敬厚く、社殿を造營し、明治に至りて、更に一層の壯觀を加ふるに至れり。境内老樹蒼鬱、林泉の美に富み、反橋櫻馬場等の勝あり、邑の西北四里に尾鈴山あり。山の半腹に尾鈴神社あり。矢研瀑は山の東南に位し、頗る壯觀を極むといふ。道路は都農より益北し、三里餘にして、兒湯郡東南端の一名邑美々津町に達す。町は宮崎町を南に距ること十四里、

美々津町

美々川の河口に位し、戸數七百人人口三千五百、瓦葺櫛比し、人烟稠密商業繁盛なり。美々川の河口は一小港を成し、船舶來泊せるもの少からず。川の南岸に、立磐神社あり。神武天皇東征の際、此處に休憩あらせられしといふ傳説ありて、社の境内に天皇御腰掛石を存し、繞らすに瑞垣を以てせり。美々川は天正六年十一月、島津大友の兩軍の奮戦せし古戰場にして、島津は南岸に大友は北岸に陣し、半日にして勝敗決せず、戦死者累々として山を成し、河水これが爲めに赤かりしといふ。

國道はこれより東臼杵郡の海岸に沿ひ、平岩財光寺を経て、富高新町に達す。財光寺の東を小倉ヶ濱と言ひ、白沙松青座ろに旅客をして佇立願望去るに忍びざらしむ。富高新町は東に細島港に至るの道路を、西に椎葉山中に赴くの路を岐ちて、街路十字形を成し、家屋櫛比せり。細島港(第六十圖)は其の東一里に位せる小半島中にありて、北に米山(一九三米)を主峰とせる丘陵を負ひ、海水深く灣入し、よく各位の風威を支障することを得るを以て、大小の船舶常に來りて碇泊し、日向灘海岸地方に於て、特に第一の良港たるの名を博せ

細島港

り。市街は海岸に臨みて、一條の街路を成し、旅館連漕店軒を並べ葦をつらねたり。戸數八百、人口四千を有す。埠頭は市街の中央にありて、大阪内海間及大阪鹿兒島間の定期汽船常に来りて寄港す。富高村字日知屋に、日蓮宗の巨刹本善寺あり。これより門川加草を過ぎ、土々呂に至る。地は大阪内海間定期汽船の寄港地なり。

延岡町は東臼杵郡の東部中央の海岸に位し、五箇瀬川の河口洲渚に近く、街路縦横商業繁盛縣下北部の一都邑を成せり。此地はもと縣と稱せしが、元祿年間今の名に改めたるもの、維新前は内藤氏七萬石の城市にして、今猶町に城墟を存せり。地に郡役所區裁判所稅務署小林區署の諸官衙縣立延岡中學校私立延岡高等女學校同女子職業學校等の諸學校あり。五箇瀬川市街の中を流れ、板田大瀬の二橋を架す。老賈富商軒をならべ葦をつらねて、街衢整正、商業繁盛なり。町の前港を爲せる東海港は五箇瀬川と北川との相合する河口にありて、港口東南に向ひ、濶さ三四町、頗る和船の碇泊に便なり。されど五箇瀬川の泥砂年々港口を埋め、水深大船を入るゝに足らざるを以て、大阪

延岡町

内海間の定期汽船は遠く一里の海中に停船して、舢舨を以てその乗降の連絡を取れり。市街の西北に高く聳えたる古城址は今、町の公園を成し、二十七八年及び三十七八年戰役戰死者の記念碑を建て、花樹を植ゑ、設備頗る見るに堪へたるものあり。此城は初め土持氏これに據り、高橋有馬三浦牧野内藤の諸氏相襲ぎてこゝに居り、以て維新廢城に及びしもの、高さ十八丈、周圍三町十九間の墨壁を以てこれを圍み、頗る金城湯池の趣を成せり。町の北部岡富村には今山の勝あり。頂上に八幡神社を祀り、眺望のすぐれたるを以て著名なり。宇古川に安賀多神社あり。其他北町にある三福寺岡富にある龜井神社舊廓内天神小路にある謠曲櫻子の墓と稱するもの等は此町において見るべきものなり。恒富村は町の南方半里餘の處にありて、中央に愛宕山(二七一米)屹立す。今、其山の半面を開きて愛宕山公園となし、櫻樹を植ゑ、堂宇を建て、噴水を設け、以て市民遊樂の地となせり。山腹に愛宕神社あり。國道は愈北し、北川に沿うて川島長井の諸邑を過ぐ。明治十年西郷隆盛が屯せし可愛嶽は、北川の谷と祝子川の谷との間に屹立し、高さ百二十米、岳

頂突兀として、遠く望むも猶明かにこれを辨すべし。山麓に古代の墳墓あり。俚俗傳へて瓊々杵尊の陵と稱す。今、陵墓傳説地として存せらる。南鄉村神門に神門神社、北鄉村字野間に全長寺あり。國道はこれより北川の谷に添ひ、熊田川内名松瀬の諸邑を経て大分縣に入る。

三田井

延岡町より五箇瀬川の上流に浜る肥後街道は、南方、北方の諸邑を経て西臼析郡に入る。三田井は郡の主邑を成し、人口三千を有し、郡役所葉煙草專賣所出張所稅務署區裁判所等あり。高千穂の地名を存せるを以て、天孫降臨の靈蹟は此地にありとするものあり。而して四王子峰は古の高千穂宮の址なりと稱す。また字御鹽井に高千穂神社あり。岩戸村に天の窟戸と稱するものあり。二上山は字押方小谷内に位し、宮小野の林丘の上に縣社二上神社あり。これより一路は西北して、阿蘇山南郷谷に達し、一は西南して、熊本縣馬見原町に達す。

宮崎町より縣の南部に入るの路は、新町九平を経て餿肥に達するものと、折生迫内海より海岸鶴戸神宮に賽し、油津港に至るものとの二路あるのみ。

餿肥町

而して此二路は油津の南方大堂津に於いて合して一となり、丘陵の間を過ぎて有明、灣頭の一邑今町に達す。吾人は先づ餿肥街道によりて取次にこれを記せんに、新町より九平を過ぎ、鰐塚連山の一嶺を越れば、地は既に南那珂郡にして、所謂餿肥地方の杉の美しき山相は、轉た人目を聳たしむるものあり。郷の原一の邑を過ぎ、二里餘にして餿肥町に至る。町は郡の略々中央に位し、戸數、千餘、人口七千を有し、市街殷賑、商業繁盛、まことに縣下南部の一名邑たるに背かず。維新前は伊東氏五萬石の城市にして、戰國時代には屢々島津氏を惱したる豪族伊東氏の根據地たりき。町に南那珂郡役所あり。城址は酒谷川に臨み、今猶殘濠を存せり。伊東氏が島津氏に對抗せし上城地、新山城地島津忠昌に殺されたる伊東祐國の墓皆なその附近にあり。以て伊東氏が當時に於ける勢力の消長を見るべし。油津港は餿肥町の東南二里に位し、細島港に次げる日向海岸の一良港を成し、港口南に向ひて一灣を作り、東西十町、南北十一町、水深四尋乃至六尋にして、大船巨船も優にこれを碇繋せしむることを得べく、大阪鹿兒島間の定期汽船は日夕汽笛を其の灣頭に

油津港

響かすを聞く。町は戸數六百、人口三千五百を有し、交通上此地方の門戸を成せるを以て、百貨輻輳、商業隆盛、市街また一種他に見ざる活氣を帯びたり。堀川橋の西畔に平野神社あり。

大島は油津港の南にある一島嶼にして、全島險崖を以て成り、最高の處三百米を有す。その南端鞍崎鼻に燈臺を設く。油津港より鵜戸に至るの道は、平山風田大浦等の諸漁村を経て二里餘にして達す。油津と平山との間に梅ヶ濱の勝あり。二三の小島嶼海中に散在し、其風景の美、多く他に見るべからざるものあり。

鵜戸神宮

鵜戸神宮(第六十圖)は官幣大社にして、鵜草葺不合尊御降誕の地と稱せらる。鵜戸村吹毛井の東北鵜戸岬の絶端に位し、其境の壯嚴なる、まことに縣下屈指の勝地たるに負かざるを見る。内海港より至るの路は七浦七阪の險を経て至るものにして、全く車を通せず。社は鵜戸岬絶端の險崖を海岸に下りたるところにありて、吹毛井よりすれば、初め石階を登り、一の華表を過ぎ、これより更に石階を下ること數十級、先づ社務所あり。境内清酒にして一點の

塵を許さず。前に日向灘の烟波漂渺として天を浸すを見る。かくて次第に奥に進めば、路は白木造の神橋に盡きて、前に一大巨岩の窟をなして屹立せるを見る。神社は其岩窟の中に鎮座し、御手洗に滴る清水は玲瓏透徹、眞に賽者をして神悸するの思ひあらしめずんばあらず。之に加ふるに海波澎湃として岩石を打ち、深潭碧を湛え、白帆日に映じ、風光の雄大また多く他に見るべからざるものあり。窟は東南に面し、東西二十一間、南北十一間、高一丈八尺、以てそのいかに雄大なるかを知るべし。宮殿創建の年月詳ならず、或は崇神天皇の時といひ、或は景行天皇の時といひ、或は推古天皇の時といふ。而して後花園天皇の長祿三年勅使を下して奉祀せしめしこと舊記に見ゆ。往昔は鵜戸大権現と稱し、桓武天皇朝、僧快久寺を此地に建て、勅號を賜ひ、鵜戸山仁王護國寺と稱し、山中に十二の支院を置きしが、慶應三年寺院を廢し、新に神官を置き、今は全く神領に歸せり。山の最高巔に速日峰陵あり。山勢隆起山陵の形を成す。日本紀の所謂葬於吾平山陵は是なりとの説あり。今、陵墓傳説地として存せらる。

油津以南の諸邑

油津港より南すれば、海灣の出入犬牙錯雜し、大堂津自井津外の浦等の諸邑相連る。就中外の浦は良港にして、海水深く灣入し、昔は日向灘沿岸無双の良港として、船舶常に幅輳せしが、慶安三年堤を築きし以來、灣内次第に埋却し、今は和船碇泊の小港たるに至れり。されど此海岸は、縣下屈指の勝地にして、海山の美多く地に見るべからざるものありといふ。これより以南都井岬に至るの地は、多くは險崖丘陵をなし、市來大納等の諸邑あれども、道路險惡交通不便にして記すべきこと少し。

福島

俣肥町より南する道路は、隈谷谷の口の諸邑を経て、網取山の分水嶺を越えて福島川の谷に下る。南鄉村板原に板原神社あり。祭神は鵜戸神宮に同じく、社殿宏壯、旅館軒を並べ、附近自づから市街の趣を成す。福島川沿岸の地はこれを總稱して福島と稱し、上町中町今町の三邑連珠のごとく連り、直ちに有明灣の海岸に達す。諸邑皆な漁村の趣を呈し、民は農と漁とを兼ね、又、製鹽を業とするものあり。北方村池上に櫛間神社、福島村上町の西に櫛間城址あり。有明灣一帯の海岸の地は概して海山の勝に富み、灣内亦水深く

田野

して屢巨艦の來泊するものあり。

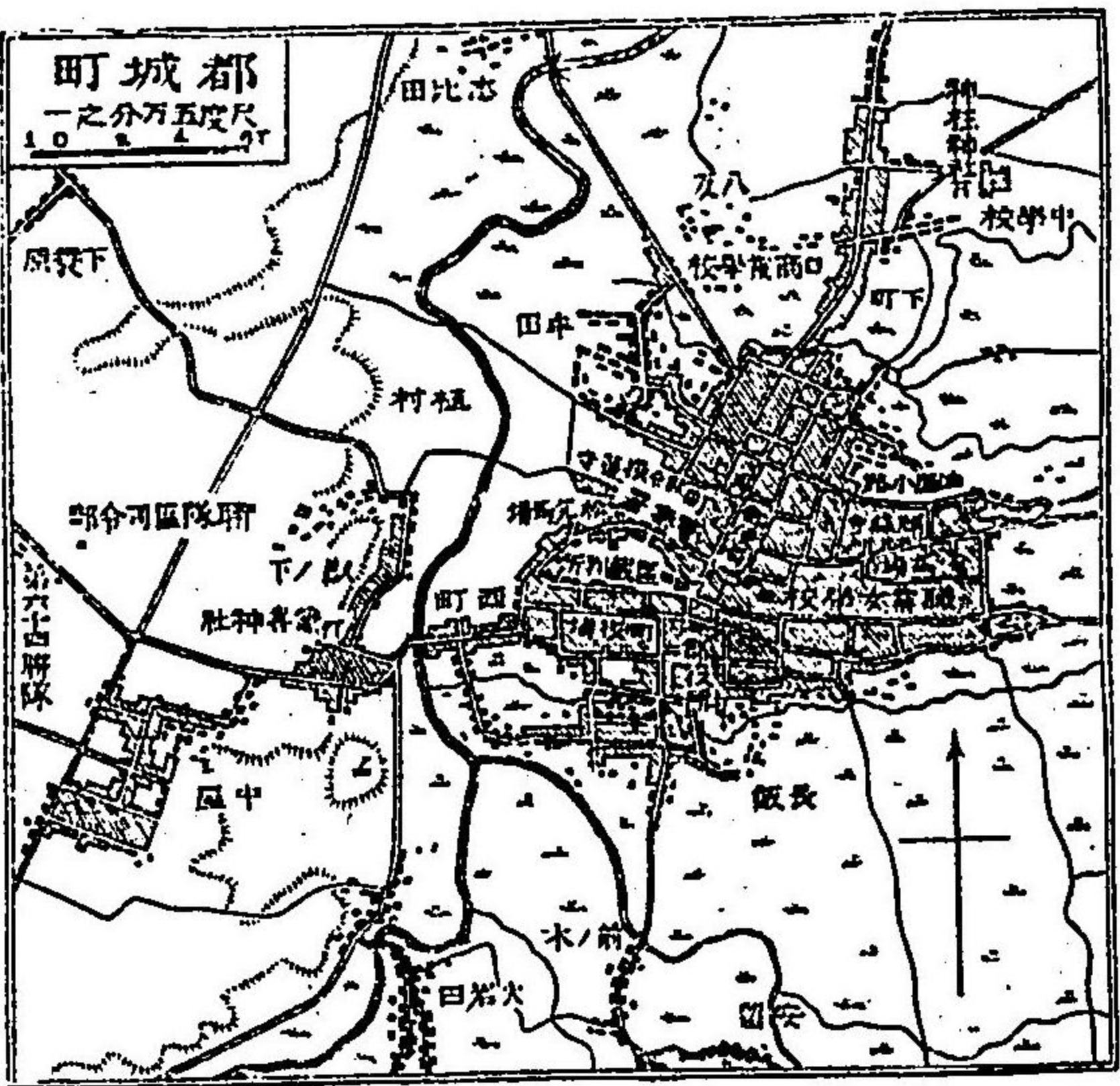
再び宮崎町に還り、鹿兒島に達する都城街道を進めば、清武臺の丘阜、蜿蜒として其前に連り、中に伊東島津兩氏の爭奪を屢せし古城墟あり。清武村中野は幕末の碩儒安井息軒の出身地にして、今猶ほ其家塾明教堂の遺址を存せり。道路は加納船引の諸邑を経て、田野に達す。邑は鰐塚連嶺の東麓に位し、都城地方に至る峠の上下驛を成せるを以て、稍々繁華の趣を呈し、車馬常に絡繹たり。字借屋原に第三紀化石の産を以て有名なる化石溪あり。松山川の水源にして、水底若くは水涯の岩石中に到る處に之を得べし。これより峠を越ゆれば、地は既に北諸縣郡にして、最初の驛を山之口と爲す。人口千餘を有し、家屋櫛比せり。邑の南里許花の木に三股城址あり。伊東氏支城の一なり。高城は山之口の西一里に位し、高岡街道の一驛を成し、地に同じく伊東氏支城の一なる高城城址を存せり。道路はこれより略南を指し、二里餘にして、都城町に達す。

山之口

都城町

都城町(第六十)は都城盆地の略々中央に位し、鹿兒島街道の要衝に當り、戸

數三千人口一萬八千を有し、縣下第二の都會を成し、物産多く、商業繁盛にして、瓦葺櫛比す。此地は島津氏の支封にして、昔は島津又は島戸といひ、



後世庄内とも稱せしところ、永和元年、島津氏の一族北郷義久此に築城し、初めて今の名を稱す。町は上町通最も繁華にして、老商巨賈軒を並べたり。其の附近に區裁判所、郡役所等あり。郵便局に對して女子職業學校あり。宮丸には眞宗の巨利願藏寺攝護寺あり。商業學校は下町にあり。神社神社は縣社にして、天照大神豊受大神を合祀し、萬壽三年平季基の建設にかゝる。土地高燥、老杉蒼鬱、境内幽靜の趣に富めり。其南に中學校あり。第六十四聯隊の營舎は其西にあり。城址は今猶殘濠を存す。此地は製絲業の

隆盛なるところなるを以て製絲會社の烟突を見、又處々に緑車の音を聞く。其他、茶瓦等を産し、附近の沃野に産する米穀は皆な一度此地に集るを以て、市況殷賑にして、其繁華は却つて宮崎町に勝れり。將來の繁盛期して待つべし。

これより道路は五十町を経て、鹿兒島縣界に達す。

都城町以北の地は高岡街道及び東霧島街道の通する處にして、大淀川庄内川の灌域なり。志和地に、北郷氏の支城志和地城址あり。高崎村繩瀬に東霧島神社あり。霧島登山の禮拜所として著名なり。

生目神社

宮崎町より東諸縣郡に入るの路は、高岡を経て、西諸縣郡に入る肥後街道と、大淀川の北岸を経て綾川の流域を傳ひ、郡の北部に至るものとの二路あり。肥後街道は大塚柏原の諸邑を經、富吉に至り大淀川を渡りて西に向ふ。途中生目村龜井山に生目神社あり。俗に生目八幡と稱し、俚俗眼病に靈驗ありと稱し、賽者常に絶えず。今、縣社に列せり。大淀川の北岸を縫へる路は、下北方柏田を経て、郡の一邑本莊に達し、これより八代郷に入る。肥後街道

高岡町

本莊

小林

を進めば、稔佐村に古城址あり。同村小山田に官祀招魂社あり。高岡町は東諸縣郡の主邑にして、國道線路中の一驛を成し、人口三千を有し家屋櫛比、人馬絡驛たり。地に、郡役所稅務署等あり。その中央に古城址あり。宇高濱に月知梅と稱する古梅樹あり。兒島郡新田の座論梅と共に縣下の名木たり。本莊は其北一里に位し、一小街を成す。劔柄神社義門寺等あり。八代村の山奥に法華嶽屹立し、山頂に藥師を祀る。

肥後街道は高岡町より愈西し、川口に至りて都城街道を分ち、溪谷の間を過ぎて西諸縣郡に入る。紙屋野尻はこの道路中の小宿驛なり。野尻村の西畔に伊集院忠真の墓あり。忠真は島津氏の家臣、父幸侃の其主忠恒に誅せられしを憤り、兵を擁して島津氏に抗し、戰敗れて殺されたるを葬りたるもの、行人憑弔の情に撲たれざるものなし。霧島登山道はこれより西南に岐る。小林は高原の中に位し、宮崎町を距ること十三里二十五町、肥後街道中屈指の宿驛にして、家屋櫛比、人馬常に絡驛たり。町に西諸縣郡役所稅務署・小林區署等あり。此附近は土地豊饒にして水田多く、小林米の名は縣下に冠たり。

加久藤

高原

狹野神社

また山地より伐採する木材は多く此町を経て各地方に運搬せらるゝを以て、商業自づから繁盛なり。宇内細野に難守國有林あり。杉の林相の美なるを以て知らる。西北方に伊東島津の交戦せし木崎原あり。伊東氏諸士の墓は今猶眞方村上馬場に残り。肥後の國境に狗留孫嶽屹立し、山頂に狗留孫神社あり。神社は巨岩の上に建てられ、賽者は嶮を侵すにあらずんば至る能はずといふ。飯野は小林附近と其の水域を異にし、川内川の水東より西に流る。人口二千を有する一驛にして、肥後に至るべき加久藤越は其西一里を隔つるに過ぎず。加久藤は鹿兒島街道肥後街道の交叉點に位し、九州幹線鐵路完成以前は貨物輻輳人馬絡驛の一宿驛たりしも、今は稍々衰頽せり。加久藤越の阪路は邑より北に向ひ、二里にして熊本縣に入る。

野尻より西南に岐れたる霧島山道は、霧島山群の東麓に連れる裾野の地を過ぎて高原の一邑に達す。邑は廣濶平坦なる高原性平野の中央に位し、人口五千を有し、此地方に於ける一中心を成し、物資の集散盛なり。蒲牟田には神武天皇御降誕の靈地と稱せられたる狹野神社あり。今、官幣小社たり。社

前の老杉樹は並木を成して連り、その蒼鬱たるさまは遠くよりこれを見るを得べし。孝昭天皇の御宇の創建と稱し、歴代の造營は舊記に散見せり。現今の社殿は明治三十二年、神武天皇御降誕大祭會の際、宮崎宮の神殿拜殿を此處に移したるものにして、境内清酒、賽者をして自づから襟を正うせしむ。この南半里、祓川に霧島東神社あり。官幣大社霧島神宮の攝社にして、崇神天皇の創建にかゝれり。高千穂峰はこれより登躋するを得べし。

霧島山

霧島火山は日向大隅の間に蟠踞し、東霧島山獅子戸岳西霧島山韓國嶽等の山岳東南より西北に向つて連る。(地形参照)東霧島山の最高の處を高千穂峰と稱し、上に天逆鋒を建つ。祓川より登躋する路は初め灌木の間を過ぎ、中ごろ童山に達し、峻崖を攀ちて達す。山麓を遶れる路は祓川より御池の畔を過ぎ、荒襲を経て、鹿兒島縣の霧島神宮のある處に達す。

米良

縣の西部は山岳重疊し、雲霧常に深く、交通の便至らず。居民皆な樵獵を業とす。兒湯郡に屬するものを米良といひ、西臼杵郡に屬するものを椎葉と稱し、共に縣下に於ける深山幽谷の地にして、前者は肥後球摩郡の人吉に

椎葉

接し、後者は八代郡の五家庄と腹背相接す。米良は一の瀬川の上流地方にして、横野村所竹原米良等の諸邑、狹隘なる溪谷に添ひて點々散在し、人家多くは山に凭り溪に枕めり。徳川幕府の時、米良主膳と稱する邑主あり。球摩の相良家に依附し、交代寄合の班に列したりき。宮崎町を距る十二里乃至十五里にして、一の瀬の支流小川の溪畔にある小川の一邑は山中に於ける一大邑を成せり。地は最も茶に適し、其他猪皮、菟蓐等の産あり。皆な妻町附近に運搬して、生活の計をなせり。近年交通や、開け、村所までは新道開通し、漸次昔日の状態を脱するに至れり。椎葉は美々川の上流地方に位し、其一部は大丸川の上流に當れり。山谷方六七里に亘り、寶木、胡麻、鷹塚等の諸山屹立し、西、肥後五家庄濱町に接する地には江代内大臣の諸嶺連亘す。往昔より土豪那須氏の所領にして、徳川幕府時代に於ては、肥後人吉藩に屬したり。奈須家系にいふ、奈須與市宗高の子小太郎宗治文治年間薩摩に下り、其後日向臼杵郡に住し、其裔孫高祐椎葉山小崎に居城すと。又椎葉山記及奈須根元記によれば、文徳年間平家の遺族椎葉山に逃竄せし由聞えければ、元久二年

鎌倉幕府奈須與市宗高に命じて征討せしむ。宗高其勢の微弱にして事を興す能はざるを見てこれを憐み、歸りて虚説なりと白す。邑人其恩を忘れず、皆那須を以て氏とし、後遂に地名となれりと傳ふ。

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣は本地方の南端に位し、東北は宮崎縣に接し、北は熊本縣に界し、西と南は全く海に瀕す。縣廳を鹿兒島市に置き、薩摩の一市七郡と大隅の五郡を管す。一市は鹿兒島市にして、七郡は鹿兒島揖宿河邊日置薩摩出水伊作五郡は始良噲啖肝屬熊毛大島即ち是なり。面積六〇二、三一方里(九二八、九七〇方寸)人口一、二七三、六七二(二方里二、二一四)を有す。各郡の最も大なるものは肝屬郡にして、七八、五六方里を占め、大島郡の六八、六二方里、熊毛郡の六三、二九方里、始良郡の六四、二七方里、薩摩郡の五五、七七方里、噲啖郡の四九、三九方里これに次ぐ。面積の最も小なるものは、揖宿郡にして、二一方里を有するに過ぎず。而して鹿兒島郡は二四、二〇方里、川邊郡は四五、二六方里、日置

人口

地勢

郡は三三、一六方里、出水郡は三五、六九方里、伊佐郡は二八、九二方里を有せり。人口の密度は鹿兒島郡最も大にして、一方里に三七〇〇人を有し、日置郡これに次ぎて一方里三六〇〇人を有す。是に次げるは、揖宿郡の三三〇〇人、川邊郡の二五〇〇人、大島郡の二四〇〇人にして、密度の最も小なるは熊毛郡にして、約六〇〇人を有するに過ぎず。

本縣は地勢複雑にして、丘陵平野と相交錯し、山岳また頗る多岐に涉れり。縣の東北部宮崎縣と接する邊には、霧島火山群聳立し、山脈之より南に延いて高隈山脈を作りて大隅の西部を南北に連亘す。其南方肝屬半島に蟠れる山塊は、高原性を帯び、海岸に向ひて急斜し、巧に陥落地帯の邊縁を表はせり。霧島火山群の西部及び北部には熊本縣との境を成せる國見山脈と、出水伊佐兩郡の四近に擴延せる出水山脈とありて川内川の上游地方及び中流地方に蜿蜒連亘す。出水山脈と中部山脈との間には、川内川の灌漑する平地狹長なる地積を占め、市邑村落の發達の頗る著しきを見る。中部山脈は薩摩の中央より大隅の中部に連亘し、數多の火山諸所に噴起し、起伏散在、頗る變化に富

めり。この南には金峯山脈低山性の地貌をなして連亘し、この東南に池田半島の突出せるを見る。池田半島は大隅の肝属半島と鹿兒島海灣を隔て、相對し、西南に幾多肢節に富める能間の小半島を造れり。この池田半島は火山火口湖に富み、地形全く他と異なる特色を呈し、山容秀麗なる開闢嶽、鰻池火山等あり。(地形の部参照)地勢かくの如くなるを以て、平地極めて少く、薩摩國にありては大隅町附近の平野及び出水町附近に發達せし小平地のみにして他は皆な河流の末流に發展せる小平原に過ぎず。大隅國に於ては、唯鹿兒島灣北岸の地及び有明浦沿岸の地に小平野を見るのみ。而して鹿兒島海灣に面せる平野は就中多大の發達をなし、東、宮崎街道に接して濱町あり、中部に九州幹線鐵道の要驛を有せる國分町あり。西岸には濱ノ市・加治木・重富等の諸邑連珠のごとく相接して、以て鹿兒島市の前衛を成せり。鹿兒島市は鹿兒島頭甲突川河口の平野に位し、絶好の地を占め、政治商業の中心をなし、又交通の要衝に當り、頗る繁華の趣を保てり。西部海岸には、萬の瀬川の河口に近く、加世田の一名邑あり。その南に坊の津枕崎等の港邑あり。

産業

縣下の産業は農業を主とし、林業・鑛業・水産業・工業等これに次ぐ。農業は米穀を主とし、養蠶・製茶・葉煙草等皆盛なり。菓實には柑橘・梨・桃・葡萄等を産す。林業は維新以前に於て既に藩主の奨励ありたるを以て、今日猶ほ往昔の林相を保ち、杉・松・檜等の伐採年額頗る多し。竹亦縣下の一名産として聞ゆ。水産亦盛にして、南部・西部の海岸、殊に漁獲物に富めり。鰹は其の首に位し、大島群島・川邊郡沿岸地方を主産地となす。鱒・鰻・鱈等亦西南海岸に多し。水産製造物は鰹節を最とし、薩摩鰹節の名世に聞ゆ。鹽藏の鱒も亦其産に富む。工業は織物に有名なる薩摩緋大島紬あり。陶器に薩摩焼あり。共に特色に富めるを以て人に知らる。鑛業は金を以て最とし、其産額本邦内地に於ける第一に位す。山ヶ野・金山・芹ヶ野・金山・大口・鑛山・牛尾・金山等何れも有名なる鑛山なり。縣下の交通を記すれば、鐵道は九州幹線の鐵路熊本縣より來り、吉松・横川等の諸驛を経て、鹿兒島灣北岸の名邑國分に達し、これより西に轉じ海岸を縫ひて加治木・重富の諸驛を経て鹿兒島市に達す。此線路は九州島の樞軸と成せるものにして、鹿兒島驛は今その終端驛に當れり。道路は宮崎街道・熊本街

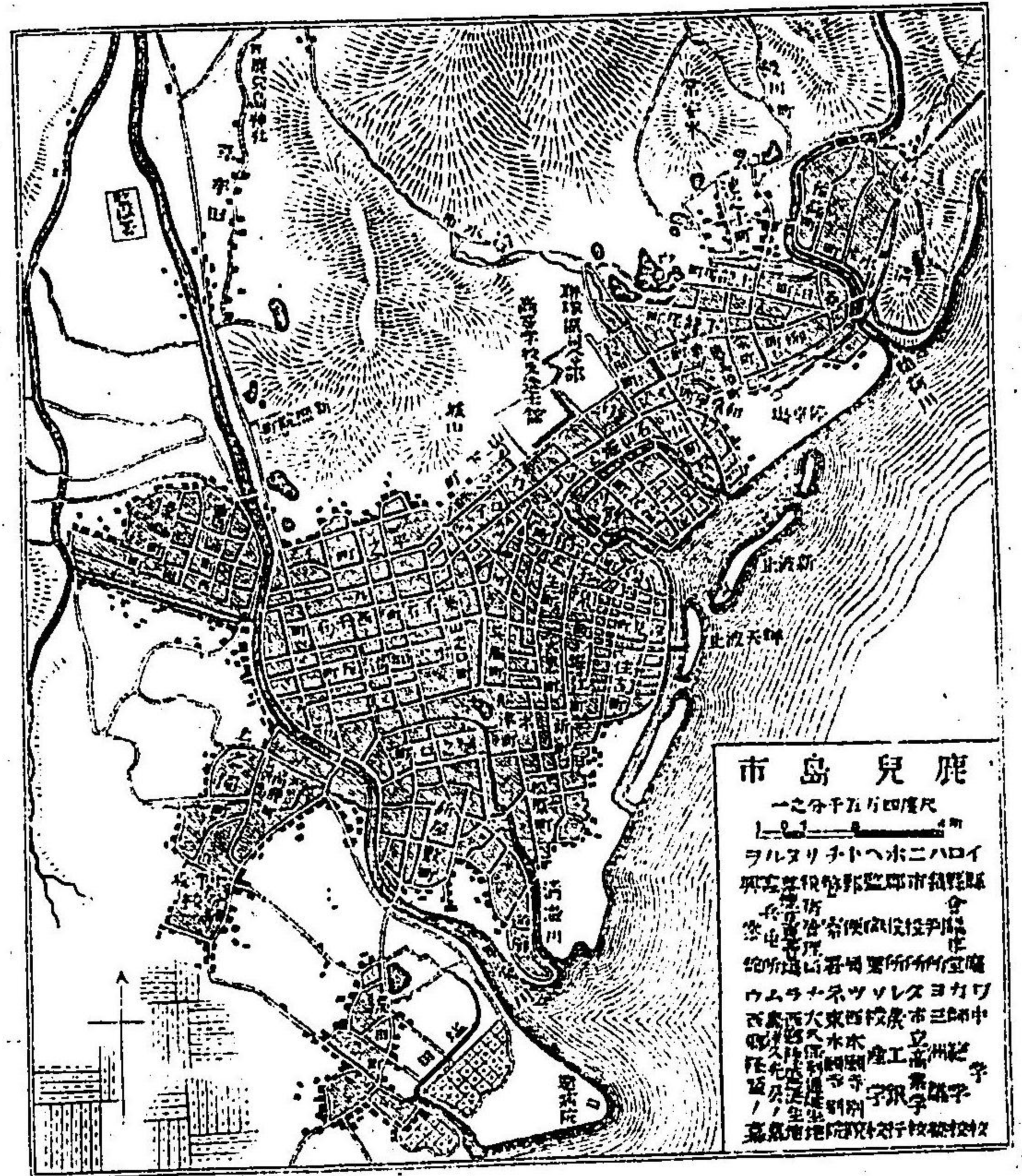
交通

道米の津街道蒲生街道伊集院街道串木野街道宮之城街道山川街道枕崎街道等あり。宮崎街道は鐵路の國分驛より東し、鹿兒島海灣の東岸濱町に達し、これより宮崎縣下の都城に達する者にして、道路良好よく車を通ず。熊本街道は鹿兒島市より西に向ひ、麥生田を経て、西海岸の一港邑市來に達し、串木野を経て、川内川に沿へる一邑向田に至り、西方に出で、全く海岸に沿ひ、阿久根を経て米の津に至る者にして、維新前は藩侯上京の本路を成したりき。肥後別路は幹線鐵路の横川驛より川内川の流域地に入り、盆地の中心大口町を経て、肥後の水俣町に達するものにして、別に大口町と出水全地の中心出水町とを通ずる一道路あり。出水町より宮之城を経て、川内川の流に沿へる道路は、附近に鑛業地多きを以て、交通頻繁、車馬絡繹たり。其他鹿兒島海灣の重富町より中部の丘陵を過ぎて串木野に至るものあり。鹿兒島市より南すれば、海灣の西岸を傳ひて池田半島の南端山川港に至るものあり。途中五位野より川邊川に沿ひて加世田に達する一路西南に向ひて岐る。川邊よりは一路更に西南に岐れて、枕崎街道を成す。大隅に於ては、前記宮崎街道の他、

福山より贈嶽郡の中部を貫きて、有明浦の一邑志布志に達する縣道あり。道路良好にしてよく車を通ず。志布志より鹿屋に達する道路は、多く高原性の臺地を経るものにして、其中央大崎より鹿兒島海灣の二村に至るの一路を岐つ。海運は南方島嶼航路東廻線西廻線の三航路あり。南方島嶼航路には種子島屋久島を経て管内の諸島嶼を巡航するものと、各島の重要な港に寄港して沖繩臺灣に至るものとの二あり。西廻線は天草諸島の間を通過し、大川三角に寄航して長崎に至るものと三角長崎博多下關を経て神戸大阪に至るものとあり。また別に串木野島平より三角長崎に至るものあり。東廻線は神戸大阪に直航するものと、油津細島に寄港して神戸大阪に至るものとあり。其他別に鹿兒島灣の沿岸地方を往來する小汽船あり。

吾人は汽船に搭じて南方より鹿兒島灣に入るとせんに、錦江灣の晴波は先づ甲板にある旅客をして思はず感嘆の聲を發せしめずんば止まざるべし。灣中に屹立せる櫻島の青螺は圓錐形の高峰微に煙を噴き、真に一幅の名畫の如く、鹿兒島市の萬莖は宛然屋氣樓の眼前に現はれたるがごとくなるを見るべ

鹿兒島市



鹿兒島市(第七圖)は略ぼ縣の中央に位置し、東は鹿兒島海灣に面し、城山の丘陵は其西を劃り、櫻島の秀麗なる火山は其東に當りて、碧瑠璃盤上に屹立して相對す。東西半里、南北一里、市坊の數四十七、戸數一萬餘人口六萬三千を有し、本

地方屈指の都會を形成せり。慶長年間島津家久の此地に移りてより五百餘年、明治維新に至るまで地は島津氏歴代の城市として、西海に雄視し、洵に鎮西の重鎮たりき。明治十年の亂、兵燹の爲めに市街全く焚蕩し、一時は殆ど焦土に變じたりしも、爾後年月を経るに従ひて、次第に舊觀に復し、今は却つて其の繁華舊時に勝るものあるに至れり。市の主要なる區劃は主として稻荷川と甲突川との間に横り、九州幹線鐵道の終端驛たる停車場は、東方惠美須町に位し、其南に新波止辨天波止等ありて、汽船和船輻輳し、以て海上交通の便を司れり。波止場より市街に掘割りたる溝渠は名山堀といひ、それに圍れたる一區を湯居町といひ、運漕店小旅店等軒をつらね、其一角に稅務監督署と市立商業學校とあり。湯居町の南には波止場に接し築町汐見町住吉町の狹隘なる街路縱横に通じ、大阪商船會社支店鹿兒島郵船株式會社大洋商船株式會社支店等相連なり、一種特色ある繁華を呈せり。停車場に起りたる東西の一路は中町通にして市の繁華なる街路を成し、老賈巨商軒をつらね薈をならべたり。和泉屋町に葉草烟專賣所あり。長田町に中學校あり。この街路の

城山公園

北に平行する道路は平野町通にして、舊城址には聯隊區司令部第七高等學校、造士館等の宏屋相連る。山下町は其西に連り、地方政治の中心區を成し、縣廳縣會議事堂地方裁判所郡役所等皆なこの一區に集れるを見る。師範學校は縣廳の東隣に位す。山下町より中町に至る街頭に郵便局あり。此附近は殆ど市の中央にして、頗る殷賑の趣を異せり。東千石町に本派本願寺の別院あり。宏壯なる大伽藍にして、その瓦甍は巍然として市街の中に聳立す。東本願寺の別院は、其南船津町にあり。同じく宏壯なる一大伽藍なり。照國神社は城山の南麓にありて、島津齊彬を祀る。今、別格官幣社たり。境内廣濶にして、社殿また壯麗なり。この傍に鶴峯神社及び招魂社あり。興業館は石造の建築にして、明治十六年の創建にかゝり、縣下著名の産物を陳列して、以て衆庶の觀覽に供す。これより北に一路を趁へば、勾配俄かに高く、暫にして城山の公園に達すべし。公園は山の半腹に位し、境域甚だ廣からざれども、市の萬甍を隔て、櫻島の蒼波の上に浮ぶを望み、風光の美人をして去るに忍びざらしむるの概あり。城山の背後は西郷隆盛終焉の地なる岩崎谷にして、一條

田の浦

の細路これに通じ、その東北の入口に大なる石碑を樹て、これを表せり。隆盛は當今の縣立病院のある所にありし私學校を根據地として此山に據り、以て大に官軍に抗したりしも、孤立久しく保つ能はず、二十餘日の後、遂に此處に自刃して終れりと云ふ。今日、病院の垣に猶當年の彈痕を存せり。谷の東北なる丘上に淨光明寺あり。隆盛以下將士の墳墓あり。賽者常に跡を絶たず。この東は上龍尾下龍尾の地にして、春日町榮町柳町等の街路其南に連れり。福昌寺門前通は南北に通ずる縦街路にして、其西方舊福昌寺の址に島津氏歴代の墳墓あり。中に齊彬久光兩公の墳墓を存す。四面石垣を以てこれを圍み、花木を處々に駢植し、城内頗る清洒なり。北部の丘陵に清水城址、東福寺城址あり。

春日町より稻荷川に架したる橋を渡れば、清水町に至る。此地に薩摩燒の陶窯あり。其附近に陶器陳列館あり。田の浦は其東北に連り、青松白砂の間櫻島の巍然たるを望み、風光の美、真に一幅の畫圖を展けるが如し。今、開きて公園と爲し、旗亭一二あり。その西に多賀神社あり。祇園の洲は稻荷川

の下流に位し、文久三年島津齊彬が大砲八十門を以て英艦七隻と對戦せしところとして著名なり。田の浦の北方吉野村に磯の島津邸あり。泉石の美を以て聞ゆ。

更に市の南部に至れば松原町に松原神社あり。舊南林寺の址にして、寺は島津氏中興の主なる貴久の建立にかゝりしもの、今貴久及び義久の靈を祀れり。其の附近に僧月照の墓あり。加治屋町には縣立高等女學校あり。甲突川は北より來りて市の西部を掠め、新上橋西田橋高麗橋武之橋等の橋梁を架して海に注ぐ。河口には浚渫の士砂を以て築きたる天保山あり。今、陸軍の練兵場たり。武之橋を渡りて南せる一路は山川港に向へる海岸路を成し、其發端地を荒田町といふ。地に薩摩緋の主産工場なる著名なる鹿兒島縣授産社あり。機杼の音日夜絶えず。産額また頗る多し。上の園町には縣立第二中學校あり。

市の物産には生絲、緋卷煙草、陶器、錫器、竹器等あり。

●櫻島は鹿兒島市より海上二哩餘、鹿兒島郡に屬す。周圍三七軒、高さ一一

櫻島

○二米を有する活火山島にして、秀麗平滑なる山脚は次第に四方に傾斜し、圓形を成せるその沿岸には、古里有村、脇瀬戸、黒神、高兎、武村等の諸邑散點す。有村、古里、黒神の三箇所に温泉を湧出し、有村最も盛なり。蓋し此島は鹿兒島市の好風光を助くるのみならず、地また冬暖夏涼、到る處海山の勝景に富むを以て遊客亦少なからず。鹿兒島の波止場を起點にせる小汽船は、有村、古里に向ひて日夕廻航し、交通の便常に絶えず。

鹿兒島市より汽車に乗じて北に向へば、鐵路は國道を相並び、崖頭海に逼る所處々隧道をつくり、秀麗なる櫻島の風光は、絶えず車窓に激盪たる晴波を展けたるを見るべし。第一の驛を重富驛となす。驛は國道筋の一邑を爲し、人口三千を有し、瓦葺晴波と相掩映して畫圖の如し。宇平松に平松神社あり。島津義久の弟歳久の靈を祀れり。此地山に凭り海に俯し、風光の明媚なるを以て來り遊ぶもの多し。停車場を去る一里、帖佐村鍋倉に、島津義弘居館の址あり。此地は義弘が朝鮮より陶工數名を伴ひ來り、今の薩摩燒の前身帖佐燒を創始せし處にして、一時は隆盛を極めしも、義弘加治木に移るに及びて

重富

工人またこれに従ひ、今は唯其跡を留むるのみ。其附近に一丘あり。田間に屹立し、山頂に薬師を祀る。これ即ち有名なる帖佐の米山薬師にして、遙かに錦江灣の蒼波を指點し、風光の美多く他に見るべからざるものあり。この地の眺望越後の米山に似たるを以て其名を得たりといふ。字寺師に有名なる古梅樹あり。花時に來り觀るもの多し。

加治木町

加治木町は帖佐の東方、錦江灣の北岸に位し、大隅國中第一の都邑にして戸數千五百人口八千餘を有し、始良郡役所中學校地方裁判所稅務署等あり。市街全く海灣の晴波に面し、遠くこれを望めば、宛として畫圖の中にあり。此地は島津義弘の老を養ひし地にして、關ヶ原役後は帖佐より此地に移り、全く風月を友として以て其晩年を終れり。この町の産物として加治木鏝物龍門司陶器等あり。其名遠近に聞ゆ。町の東部に黒川岬の岬突出し、黒川其縁を流れて海に注ぐ。岬頭、奇岩怪石に富み、風光愛すべし。町より北に岐れたる一路は、溝邊を経て、横川に至るものにして、大口街道の別路を成せり。日木山に龍門瀑あり。藏王嶽の西北に懸垂し、高さ十二丈、幅三丈、瀑

國分

姿清妍、頗る見るに堪へたり。橘南谿の西遊記に「隅州加治木の北に龍門の瀑と名づくるものあり。昔、唐人加治木の港に入船せし時、甚だ此瀑を愛して常に此處に遊び、唐土の龍門瀑を見る心地せりとて、この瀑をば龍門の瀑と名付けりとぞ」と記せるは即ち是なり。汽車はこれより海岸を繞り、濱の市を過ぎて、國分驛に達す。此附近は新川の河口に衝りて、やゝ海岸平野をなし、海中には盃島邊田小島沖小島等の諸島嶼散點し、風光頗る明媚なり。國分は往昔大隅の國府のありし處にして、濱の市は其津頭をなしたりき。蓋し濱の市の名は島津義久が富隈城にありし時、この濱の舗を開き給ひしより此名ありしものにて、遂に驛名となりしものなり。國分は國分及び東西國分の三村に岐ち、國分の一邑は國道に連り、人口八千を有し、停車場は其東部にあり。宮崎街道人吉街道の三角點に當れるを以て、行客頻繁貨物輻輳す。富隈城址は文祿年間島津義久の建築せしものにして、停車場を距ること十五町、今、大字住吉の松林の中に存す。附近に奈牙木杜氣色杜等の勝あり。鹿兒島神社(國分八幡)は官幣大社にして、西國分村宮内にあり。人吉街道より其

鹿兒島神社

祠宇を望むことを得べし。(第七十) 往昔の一の宮にして、彦火々出見尊を主とし、應神天皇仲哀天皇神功皇后を配祀す。社殿は高爽なる地位にあり、宏壯偉麗頗る美觀を呈す。境内には老樹鬱蒼として、眞に人をして太古の遺址たることを思はしむ。寶物には彦火々出見尊の海神より得しといふ千珠滿珠の玉を稱するものを藏す。國分寺址は國府村上小川にありて、田間猶往々にし古瓦の破片を出すことあり。國道を北に進めば、日當山温泉あり。一に木房温泉と稱し、新川の河畔に湧出し、泉質弱アルカリを含む。浴舎數戸あり。また幽靜の地たり。猶北すれば、鐵路は國道を離れて西北の山中に向ひ、嘉例川の一驛を過ぎて、横川驛に達す。國道上には安樂温泉あり。地、幽靜にして旬日の操浴に適せり。犬飼瀑は中津川の上流にありて、高さ十六丈、頗る奇姿に富めり。瀑畔に和氣清麿遺蹟の碑あり。この附近に和氣温泉鹽浸温泉山の湯温泉等あり。

霧島神社參拜路は國分驛より國道に分れ、郡田大窪等の諸邑を経て達す。里程五里餘なり。霧島神社は霧島山の西麓に位し、一の華表の中に旅館旗亭

霧島神社

横川

參差として相連る。地、既に高燥、遙かに錦江灣の風光を一眸の中に集め、其眺望の絶佳なる、人をして思はず快哉を叫ばしむ。人家盡くる處華表あり。直ちに霧島神社のあるところに達すべし。神社(第七十)は官幣大社にして、彦火々出見尊鵜草葺不合尊を祀り、縣下屈指の古社として著名なり。社殿は丹堊にして、瑞籬これを透り、結構宏壯ならざれども、亦趣致に富めり。境内老杉鬱蒼として聳え、座ろに賽者をして襟を正うせしむ。高千穂峰に登躋せんと欲するものは、これより叢林の間を分ち、熔岩磊塊たる間を過ぎて三里にして達すべし。山の西麓に榮の尾温泉硫黄谷温泉あり。地、高燥にして眺望に富むを以て、遠近行いて浴するもの多し。牧園村に鹿兒島種馬所あり。横川驛は始良郡丘陵中の略々中央に位し、これより大口町に至る縣道と薩摩郡の黒木地方に赴くの道路との分岐點に當り、且つ山ヶ野金山の重要交通路を成せるを以て、山間の一邑なるに拘らず、特色に富める繁華を呈せり。山ヶ野金山は其沿革も舊く、其産額も多く、縣下屈指の鑛山なり。近年更に規模を擴大し、電力を使用し、最新式の製鍊機を裝置し、施設の完全なる、

實に縣下に冠たり。年平均産額は四十萬圓より五十萬圓に達し、島津侯の經營に屬せり。横川より鐵路に添ひて進めば、丘陵や、開けて、東に霧島火山群の一なる栗野岳を望み、狹長なる平野を屈折して川内川の横流するを見る。川の南畔に栗野の一邑あり。人口三千を有し、附近の一集落を成す。鐵路はこれより吉松の一驛を過ぎて、宮崎縣に入る。

横川驛より大口盆地に向ふ一路は、丘陵の間を西北に向ひ、長池附近より遞次降下して、眞幸川の流域に至る。大口盆地は南北に長く東西に狭く、眞幸川羽月川の二川その盆地の中央に會して川内川となり、西南丘陵の間を破りて薩摩郡に入る。大口町は羽月川の東方に位し、肥後別路の要衝に當り、人口五千を有し、伊佐郡役所の所在地なり。盆地の中心を成し、傍ら著名なる鑛山其附近に多きを以て、人烟稠密商業繁盛なり。往昔は島津氏の臣新納武藏守忠元の治所たりし處にして、地に今猶古城趾を存す。天正十五年、豊臣秀吉泰平寺に於て島津氏と相和し、軍を還して大口を經肥後に出でんとするや、忠元此城に據り、秀吉の歸路を遮る。義久これを諭すこと再三、忠元止

大口

むを得ずして城を出で、秀吉に謁す。秀吉其忠勇を嘉賞して薙刀道服を與へし逸話は、史を讀むもの、皆な知る所なり。町に忠元の靈を祀れる忠元神社あり。また舊祥雲寺の跡に忠元の墳墓を存せり。大口鑛山は町の北方一里に位し、金銀の産出尠ならず。機械は總て電力を用ゐて運轉し、設備大に見るべきものあり。牛尾鑛山は大口鑛山の上部に位し、同じく金銀を産す。設備また頗る完備せり。大口町よりは出水郡に通する一路西に岐れ、本路は西北して熊本縣葦北郡界に達す。

鹿兒島市より熊本縣に通する國道は、市より北して伊敷郷に入り、これより中部丘陵地を西に向ひ、伊集院を經て、西海岸の市來地方に至る。鹿兒島電氣株式會社の發電所は伊敷村大字小山田の内なる河頭と諏訪の瀧との二箇所にあり。後者を第一發電所と稱し、前者を第二發電所と稱す。河頭に冷泉あり。浴客少なからず。麥生田は街道の一小驛を成し、車馬常に群を成せり。伊集院の一邑は麥生田の西南一里に位し、日置郡役所を置き、人口四千を有す。別に鹿兒島市より此地に至る街道を伊集院街道といふ。宇徳重に徳重神

伊集院

市來

社あり。苗代川は薩摩焼陶器の生産地にして、錦襦袢の一生面を開きしは、實にこの陶窯なり。維新後一度衰退せしを沈壽官なるもの銳意其の恢復を計り、一時は多少の海外輸出を試むるに至りしも、壽官歿後また甚だ振はず、惜むべし。頼山陽の詩に、路逢朝鮮淨獲孫、窯陶爲活別成村、可憐埴得扶桑土、造出當年高麗盆に詠せるは即ち是なり。市來は全く海に面し、湊川其北を流れ、河口は和船の碇泊所を成せり。人家は漁商相半し、おのづから一種の特色を帯ぶ、島平港は其北半里の處に位し、松樹亂立するの間、數百の人家を認むべし。西に長崎の一岬角突出してよく北風を支障し、附近の一良港たり。現今、肥後汽船株式會社は三山汽船合名會社と聯合し、隔日に長崎三角行の汽船を出帆せしむ。此地に海水浴場あり。夏時は來り遊ぶもの多し。前に横れる照島は、干潮の時は徒渉して至るべく、危岩怪岩多く、松聲は常に濤聲と相和す。此島頗る眺望に富み、吹上の濱の盡くる處野間の海角を望み、遙に會島の諸島嶼を指點し、朝陽夕暉の美容易に狀すべからざるものあり。且、此附近は縣下屈指の漁業地として名あり。國道はこれより海岸を離れて全く

串木野

川内

北し、串木野の一邑に達す。邑は人口七千を有し、人烟稠密なり。この西一里、羽島に羽島嶺山あり。此地は慶應元年、薩藩が苟かに森有禮吉田清成の諸子を英國汽船に托して海外に赴かしめたる處として著名なり。羽島の北方一里に、大辻鼻の岩洞あり。海潮洞口に激し、頗る奇觀を呈す。

串木野の北、薩摩郡の郡界に芹ヶ野金山あり。著名の嶺山にして、設備産額共に大に見るべきものあり。今、島津公の經營にかゝる。其他三井氏の經營に成れる角石嶺山あり。かくて鑛業用の水車の處々に運轉せる間を北に向へば、坦々たる國道を挟みて、稜々たる田圃相接し、所謂隈之城田圃の豊饒なる地區の前に展開せらるゝを見る。川内は川内川を挟んで向田白和大小路の三區より成り、商業殷賑、百貨輻輳、その繁華は鹿兒島市に次ぐと稱せらる。川内川は此附近に至りては、既に溶々として大河の趣を呈し、帆船常に上下し、櫓聲欸乃の聲を絶たず。上流地方の物資皆此の處に集り、繁盛なる一河港を成せり。明治三十二年、川に一大鐵橋を架し、名づけて大平橋といふ。

宮之城

向田より岐れたる一路は東して桶脇郷入來郷に達し、大小路より川の北岸を縫へる道路は、南瀬二渡を経て、薩摩郡の中央宮之城郷に向ふ。前を辿れば桶脇村に市比野温泉あり。蘭牟田郷に蘭牟田池あり。冠嶽の奇峯は其南に連亘す。入來村には副田温泉あり。宮之城は川内河畔の一名邑にして、人口三千を有し、市街整正、商業殷盛なり。縣下著名の養蠶地にして麻苧を産し、授産社第二部の工場あり。繰車の響常に絶えず。邑に島津義弘の弟歳久の居城たりし古城址を存す。邑の東北里許、川内川の兩岸絶壁を成し、長さ五六町の間、河流匹練を張れるがごとく流下し、奔湍岩に激して、其音遠雷のごとし。名けて轟の瀬といふ。この上流曾木に曾木瀑あり。川内川の流三段を成して落下し、壯觀名狀すべからず。宮之城より出水郡の武本に至る道路は、紫尾山街道と稱し、紫尾に紫尾神社及び紫尾温泉あり。

國道は川内より西に向ひ、二里にして網津に達す。此附近は天正十五年豊臣秀吉が島津氏を征討せし時、肥後の佐敷より舟路川内川の河口京泊に上陸し、高江の猫岳に陣し、以て其内部に攻め入らんとせし古戰場にして、豊臣

泰平寺址

京泊

島津兩氏の媾和せし泰平寺址桂神祇忠防の勇戦せし平佐城址今猶ほ存せり。泰平寺址は大小路にありて、麥壠菜圃の中に當時の庭石とも覺しき一片石を存す。俗に呼んで降參石といふ。寺は寛政年間火災に罹りて焼失し、義久が薙髮して秀吉に謁せし寺院は今見る能はざれど、此附近を逍遙して兩雄會見の當時を追想すれば、感慨禁すること能はざるべし。秀吉は此處より宮之城に出で、大口盆地を経て、凱旋の師を肥後に旋せしなり。大小路の西半里、宮内に國幣中社新田神社あり。境内清酒、社殿宏壯なり。社殿の背後に可愛山陵あり。傳へて瓊々杵尊の陵となす。神龜山の北に屋形ヶ原あり。往昔薩摩國府のありし處にして、國分寺は豊臣島津二氏の兵燹にかゝりて焼失し、田間往往にして古瓦を發掘することありといふ。京泊は川内川の河口にして、藩主の江戸上京の際は此處より舟路に就くを例となしたりといふ。今猶ほ小良港を成せり。

網津より西方に至る間は、奇岩亂立し、青松これを繞り、風光の美殆ど應接に暇あらず。就中、平瀬鼻最も佳絶と稱せらる。西方は人口三千を有し、

阿久根

漁商相半す。阿久根は其北三里に位し、往古よりの宿驛として著名なり。古來米と焼酎とを産し、阿久根茶阿久根焼酎の名は縣下に高し。邑は人口四千を有し、南に倉津鼻突出し、大島桑島元の島小島等の島嶼散點し、風光頗る佳なり。桑島には蒲葵樹繁茂し、一に蒲葵島の名あり。この海岸鮑魚鱈節海松等を生ず。脇本港は阿久根の北二里に位し、水深からざれども灣入深く碇泊に便なり。この小半島と長島との間は所謂黒瀬戸にして、狭きところ二三町、廣きも四五町に過ぎず。潮候には狂瀾急駛し、頗る奇觀を呈せり。蓋し薩摩に至る海門の一險要たり。

出水

阿久根より丘陵を過ぐる二里、出水平野は忽ち其前に展開せらるゝを見るべし。出水は、其平野の東隅に位し、この附近の一中心を成し、出水郡役所また其地にあり。人口五千を有す。國分指宿と共に縣下に於ける煙草の主産地として聞ゆ。附近に島津氏最初の居城地たりし木牟禮城址あり。米の津は平野の東北端に位し、肥後國道の最終端驛たり。廣瀬川の河口は良好なる港を成し、三角市來間の汽船は日々寄港す。交通の不便なりし時にありては、

伊佐

肥後の三太郎の險を避けて、此地より舟路に就くもの多く、従つて重要な縣下南部の港津として著名なりき。この海岸車海老を産し、出水海老の名あり。これより一里半にして、熊本縣々界に至る。往昔薩藩が嚴に行人を檢せし出水關址今猶存す。

鹿兒島市よりその西南及び南部に達する道路は、吉利街道加世田街道枕崎街道山川街道類娃街道等あり。吉利街道は西海岸伊佐に達するものにして、鹿兒島より水上阪を越え、伊集院日置を経て吉利より伊佐に至る。吉利は人口四千を有し、舊小松氏の領地たり。地、海岸に臨み、風景頗る佳絶なり。伊佐は島津義久及び義弘の誕生地にして、歴世薩藩の直轄たりき。紙の主産地にして、商業殷賑なり、田布施は伊佐に隣り、金峰山其東に屹立す。山頂に藏王權現あり。龜ヶ城址は多布施村にありて、島津貴久誕生の地なり。龜石年くらべの松等の勝あり。吹上の濱は市來より萬の瀬川の河口に至るまでの十數里の間の平滑なる海岸を稱せるものにして、西北の風常に白砂を巻き、松樹皆な地に伏し、一望際なし。海上に小島あり。久多島といふ。加世田は

加世田

片浦

枕崎

萬の瀬川の河口に近く、人口七千を有し、此附近の一小中心を成し、市街般販商業繁盛なり。鹿兒島市より此地に至る道路は、山川縣道の下福元より西南に岐れ、川邊の一邑を経て至るものにして、川邊より枕崎街道南に岐る。加世田の西方は所謂能間半島を成し、その北部海岸を屈折せる一路は、小松原・小湊大浦の諸邑を経て片浦に至る。地は外側に高島及び楯羽島あるを以て狂瀾を防ぎ、自づから北海岸の一小港を作れり。縣下著名の漁業地にして、水産試験場鱒漁株式会社・鱒詰製造會社等あり。これより五〇五米を有する野間岳の北腹を掠め、二里にして半島の絶端野間岬に達す。岬は古の笠狭碕にして、神代記に天孫瓊々杵尊が「到吾田笠狭之碕登長屋之竹島」とせるは、即ちこの地なりと傳ふ。

加世田より枕崎に至るに二路あり。一は津貫を經由し、一は勝目に至りて川邊より來れる道路と合して南す。共に里程五里を算す。枕崎は薩南屈指の名邑にして、人口八千を有し、商業繁盛、人烟稠密なり。松崎鼻長く其西南に突出し、沖立神山立神の奇巖高く海波に聳立す。灣入深からざれども、水

坊の津

深甚大にして、よく大船を碇繋せしむるに足れり。且つ此地は著名なる漁業地にして、鯉鱒の産甚だ盛に、漁期の股販は多く他に見るべからざるものありといふ。枕崎鱒漁株式会社あり。主として鱒の漁獲に従事す。邑の西二里を隔て、坊の津あり。港灣西に開き、船舶の碇泊に便なり。此地は往昔は筑前博多津・伊勢安濃津と共に三津の稱ありしほどの要津にして、中古は遣唐使など皆此處に帆を開くを例となしたりき。これ一名唐の湊の名ある所以なり。蓋し往時にありては、其繁榮頗る眼を刮するものありしが如し。灣頭には奇岩聳立し、怒濤これに碎け、風光の美思はす人をして驚心駭目せしむ。御崎の岩頭に一大岩洞あり。船を舣して往いて訪ふもの多し。枕崎の北に鹿籠嶺山あり。金銀を産す。

穎娃街道は指宿川邊兩郡の南部を東西に横断せるものにして、山川縣道の指宿より池田を経て、穎娃に達し、これより枕崎に至る。其間七里餘にして、多く車を通せず。穎娃より山川に至る道路は開聞嶽の北麓を經、池田湖の南を掠め、四里餘にして達すべし。穎娃は海岸の一名邑にして、人口三千を有

し、鯨漁の盛なるを以て世に聞ゆ。其南方一帯の海岸は、平滑なる砂濱にして、川尻浦と稱し、南に薩南の名山開開岳の盡のごとき秀姿を仰ぎ、風光の美多く他に見るべらざるものあり。開開岳は獨立せる休火山にして、標高九一五米を有し、其山容の秀麗は、この近海航路の好目標たるものなり。北麓に國幣小社牧聞神社あり。大日靈命を祀れり。又南麓海岸には蘇鐵叢生す。火口湖なる池田湖は類姓街道と山川街道との中間に横はり、其形渾圓を成し、周圍四里二十九町を有す。類姓新道の峠より其全景を観るを得べし。鰻池火山は池田湖の東に位し、同じく獨立火山にして、火口湖鰻池あり。其東岸に鰻温泉あり。

山川

山川港(圖甲七十)は池田半島の東南に位し、港は瓢形を成して西南に灣入す。港口に岩礁あり、大船を容るゝ能はざれども、港内水深くして、東風の外各位の風威を支障するを以て、船舶常に来り泊し、よく鹿兒島海灣の門口を成せり。島津氏藩政時代にありては、琉球諸島との交通一にこの港より往來せしを以て、頗る繁榮を呈したりきといふ。現今、鹿兒島市及び大隅肝屬半島

にある大根占小根占地方に小蒸汽船常に往復し、交通甚だ便なり。市街は海灣に面し、光景宛として一小畫圖の如し。人口五千を有す。魚見岳は指宿村の東方多良岬の岬頭にあり。其尖端を尾掛鼻といひ、其麓を多良浦と云ふ。多良浦に多羅神社あり。指宿附近には、温泉處々に湧出し、彌次ヶ湯二月田村の湯摺の濱柴立等の稱あり。彌次ヶ湯最も盛なり。多くは鹽類泉にして、摺の濱は蒸湯を以て聞ゆ。鹿兒島市より日夕往來する小蒸汽船は、湊浦に寄港するを以て、浴客常に群を成す。

鹿兒島市より此地に達する縣道上には、谷山喜入等の諸邑あり。谷山の海上には七ッ島の勝あり。知覽は喜入の西二里にありて、川邊に至る道路上の大村たり。

宮崎縣都城町に達する道路は、九州鐵道幹線の國分驛より鹿兒島海灣の北岸を傳ひ、直ちに敷根の地に入る。福山の一邑は其東南海岸にありて、往昔廻氏の城主たりしところなり。今、人口四千を算す。道路はこれより急峻なる阪路を登りて峠に至る。願れば錦江灣の風景一眸の中に集り、其美容易に

福山

牛根

鹿兒島市より大隅國に至る小蒸汽船は、古江浦を中心となし、これより大根占・小根占等の海岸に寄港す。嘯吹郡南部及び肝屬半島に赴くには、古江に上陸するを便とせるを以て、區域狭小なれども、人家稠密行客頻繁なり。人口四千を有す。垂水は其北に連り、葉烟草を産するを以て名あり。海瀉の海岸に近く江の島の一小嶼あり。風景のすぐれたるを以て聞ゆ。牛根は關ヶ原の敗將浮田秀家の身を遷したる處にして、今猶ほその遺蹟を存せり。始良村上名に吾平山陵と稱するものあり。稱して鷓鴣嘗不合尊の陵と爲す。大根占村の海岸上の濱は鹿兒島より來航する小蒸汽の埠頭にして、稍繁盛なり。此地東北は城ヶ岬突出し、巨岩海邊に横はり、右に櫻島、左に開聞岳を望み、頗る海山の風光に富めり。大根占の南、小根占郷は昔時禰寢院の領主小松家・在城の地にして、富田城・國見城の遺址あり。文祿年間小松家封を吉利に移さるゝに及び、義久屢々この地を巡見し、行館を川北宮原に置けり。この地、

鹿屋

對岸の山川港と粉壁相對し、鹿兒島海灣の門口を成せり。密柑の良好なるものを産す。小根占川は上流を雄川と稱し、田代附近に於て懸崖瀑布を爲し、頗る壯觀を呈す。花瀬川の上流、また溪山の美を以て聞ゆ。海岸路は小根占より南し、險崖丘陵の間を縫ひ、邊田伊座敷等の諸邑を経て、遂に肝屬半島の南端佐多岬に達す。岬の東南二十三海里を隔て、種子島の青螺長く横はり、其間に所謂有名なる大隅海峡を作り、黒潮爰に駛潮をなして、交通最も危険なりと稱せらる。岬端に晴天光達二十一里に及べる一等不動白色燈臺あり。また、海軍の望樓あり。無線電信を裝置す。御崎神社の附近には、蘇鐵樹繁茂す。再び古江浦に還り、これより東に向へば、二里にして半島の主邑鹿屋あり。邑は高原の上に位し、人口五千を有し、肝屬郡役所區裁判所稅務署等あり。商業や、繁盛なり。鹿兒島府立農學校は此地にあり。また梨菓園あり。鹿屋梨の名を以て聞ゆ。これより道路は串良大崎の諸邑を経て有明浦地方に至る。有明浦海岸地方に達する路は、此他福山より岩川を経るものと、二川より

岩川

上百引を経て大崎に至るものとの二あり。岩川は噺吹郡役所の所在地にして人口四千を有し、稍繁華を保てり。この附近恒吉市成野方等は古來産馬地として著名なりし處なり。有明灣は平滑なる數里の砂濱にして、東南に面し、海波淼漫、一大碧灣を擁し巨艦時に來泊す。浦の東北端に志布志の一邑あり。水産物に富み、商業また盛なり。地に名刹大茲寺趾あり。海中に一小島あり。蒲葵を生ず。

種子島

種子島は肝屬半島の東に横はれる一大島にして、東西に狭く三里、南北に長く六里、面積二八方里を有し、佐多岬を距る二十三湮のところに位す。全島低き丘陵より成り、海岸地方に少許の平地を見るのみ、島を北種子中種子南種子の三集落に分ち、北種子の西岸に赤尾木港あり。島中唯一の良港にして、本陸より此地に來る船舶は皆此處に集る。地に熊毛郡役所あり。人口四千を有す。島の南部は甘藷を産し、北部は砂糖を産す。赤尾木港の沖に文鯨魚多く集る。屋久島は種子島の南に横はり、其間は種子島海峡を成す。種子島とは全く地形を異にし、渾圓形を呈し、絶壁高く四面を劃り、其最高點宮

屋久島

大島

浦岳は實に一九三〇米の高さを示せり。面積三十二方里を有し、薩南開聞岬より四十七湮、種子島の赤尾木港より三十二湮を隔てたり。島の北方にある宮の浦港は、島中唯一の良港を成し、船舶常に輻輳す。島を上屋久下屋久の二集落に分つ。南方の沖に文鯨魚を産す。

大島郡は薩南諸島より成り、口之永良部島竹島硫黄島口之島中の島諏訪瀬島平島臥蛇島惡石島寶島横當島大島徳の島沖之永良部島輿論島等皆なこれに屬す。大島最も大にして、面積四十八方里を占め、開聞岬の南一七三湮の海中に横はれり。地勢丘陵性の山岳に富み、海岸處々に平野を雜ゆ。島に灣入多く、笠利灣名瀬灣燒内灣薩川灣住田灣等の名あり。名瀬港は名瀬灣内にありて、港内水深く、南方航路中屈指の良港を成し、汽船帆船常に來り泊す。地に大島郡役所あり。産業また多く、砂糖の産地として名高く大島紬の名亦天下に聞ゆ。又甘藷、蘿蔔等を産す、地温暖にして山には蘇鐵叢生す。

飯島は薩摩の西方一四海里の海中に位し、上飯島中飯島下飯島の三島に分たる。全面積七方里餘にして、中飯島と下飯島との間に蘭牟田瀬戸をつくる。

飯島

管治は薩摩郡に属し、上飯島の北部に里港あり。下飯島の南部手打灣に手打港あり。海岸漁業盛にして、上飯島の南部に鰹、下飯島の東方近海に鯛・珊瑚等を産す。

大日本地誌 卷八 終

頁	行	誤	正
八	一二	火山野	火山野
一六	六	祖母嶽	祖母山
三七	一一	四岸	兩岸
四五	九	志摩半島	志摩半島
七九	五	噴氣孔及び温泉	噴氣孔を作り又所々に温泉
一一四	六	天草灘に面する	天草灘に面し
一二八	一四	水の松原	虹の松原
一三八	七	萩尾村	萩尾村
一四八	七	樽尾岳	樽尾岳
二二六	一〇	鳥ヶ島	鳥ヶ島
二二六	一一	小島	邊田小島
二二六	一三	の一行を「邊田小島は南北に長く最高點一二四米に達し沖小島は一〇〇米なり」と改む。	
三〇四	一三	峭高く	峭壁高く
三二三	一二	石灰層	石灰層
三七七	一四	外輪山前山	外輪山眉山
三八一	八	鱈灰石	鱈石英
四〇四	一三	角内富士岩	角内富士岩
四五四	五	兔珍彦	珍彦
四五四	六	狹津彦	免狹津彦

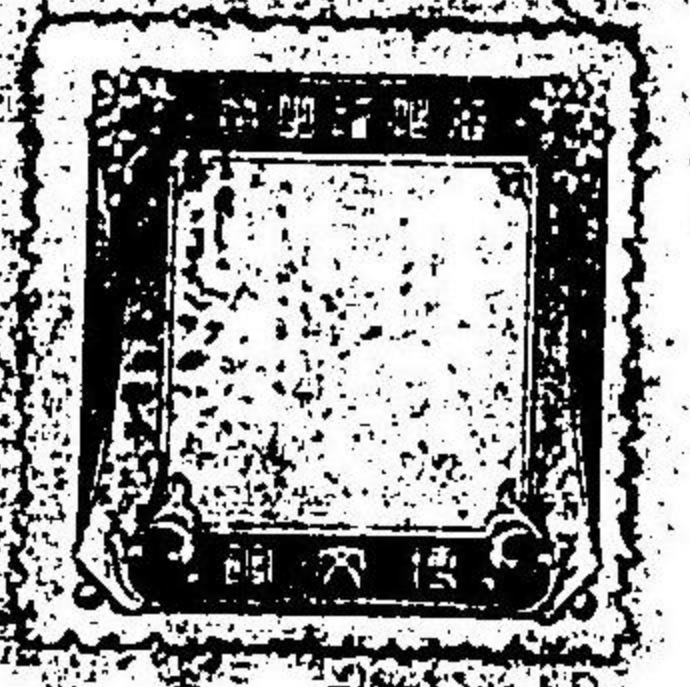
頁	行	誤	正
四五九	二	中之二年	中元二年
五六三	一四	日野河	日野江
五九二	表の第十二の下の第二十は十二の誤、第十八の下の第二十三、第二十四を脱す。		
五九七	一四	壹岐對馬	壹岐
五九八	一	第三海軍區に属すの下に「對馬は朝鮮全海岸と共に第五海軍區に属す」の十九字を脱す。	
五九八	四	其他の下に「第五海軍區内には」の八字を加ふ。	
六〇一	一〇	開設せらるゝありの下に「又新に九州帝國大學工科大学の開始せらるゝあり」の二十二字を加ふ。	
六〇五	表の中縣立壹岐中學校	縣立壹岐分校(郷の浦)	
六〇六	表の中に「女子師範學校(鹿兒島市竹下町)」の十三字を加ふ		
六〇七	一	福岡大分長崎の三縣 福岡、大分、長崎、鹿兒島の四縣	
六〇八	九	造士館の下に「同市長田町に高等農林學校」の十二字を加ふ。	
七四〇	一四	肥薩線	鹿兒島線
八二三	九	綾田向田	綾田の向田
八二四	一	東南	南
八五三	八	一億五千噸	一億五千萬噸
八八四	一二	化石層	化石層
九〇三	一	霧島火山中	霧島火山中
九七二	一三	武天	武天皇

明治四十四年二月廿一日印刷
明治四十四年二月二日發行

(大日本地誌
第八卷九州奥付)

不許複製

定價金參圓



著者
發行者
印刷者
印刷所

山崎直方
佐藤傳藏
大橋新太郎
水谷景長
博文館印刷所

東京市日本橋區本町三丁目八番地
東京市小石川區久野町百〇八番地
東京市小石川區久野町百〇八番地

發行所

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

振替貯金口座東京二四〇番
販賣部電話本局二六二〇番

理學士 佐藤傳藏君 共著
 理學士 山崎直方君 共著
 齊藤文學士 大塚文學士 田山花袋君 其他數君 補助

大日本地誌

全拾卷

各册列背皮 裝釘偉麗
 總紙數約壹萬頁
 每地圖及寫版數十葉

大日本地誌は全く在來の地誌と異にして、其目的方針を異にし、極めて詳密極め、明晰なり、體式は一に歐洲最新式を採り、麗なる精密地圖寫眞版數多を挿入し、各山系水系湖澤港灣の形勢及び氣象を詳述し、又各史蹟を地理的に描寫して古今興亡の沿革を明にし、其他行政司法軍事教育宗教交通の狀勢を詳に産業部に於ては農業工業商業鑛業林業の六部に地方の特業を記述し、各名勝古蹟は其材料の豊富なる調査の精確なる卷册の浩瀚なる製本の美麗なる一として、全部拾卷總紙數約壹萬頁にして、山崎佐藤の兩先生は斯學の大家として、知名地理家數學家を以て、空前の大地理書なり。

第壹卷 關

東

方面地圖八枚(着色版)
 寫眞銅版八十一頁
 紙數八百三十頁

正金貳圓五拾錢
 小包料金拾六錢

地文

第一章 地形
 第二章 海洋及海岸線

第三章 地質
 第四章 氣象

第三章 地質
 第四章 氣象

統○三波川系○古生大統○中生大統○新生大統○噴出岸○溫泉
 雲霧○氣溫○氣壓○風向及風力○雨霜○湿度○西南諸島及び小笠原島の氣象

人文

第一章 沿革

第二章 政治宗教

第二章 政治宗教

府時代○南北朝時代○後鎌倉時代○鎌倉幕府時代○室町幕府時代○江戶幕府時代○諸族割據時代○織田豐臣の時代

第一卷重要目次

地方誌

東京府及伊豆七島小笠原島。埼玉縣。茨城縣。群馬縣。千葉縣。栃木縣。

銅版圖

箱根火山の圖○榛名、赤城附近の圖○榛名火山赤城火山の圖○日光火山の圖○東京灣の圖○鎌倉沿革圖○東京附近鐵道線路の圖○東京市の圖○横濱市の圖(以上)
 其他挿入圖○國造配置の圖○後北條氏全盛時代の圖○徳川氏初世諸侯分布の圖○浦和町○前橋市○高崎市○宇都宮市○入木版○水戸市○桐生町○足利町○八王子町○熊谷町○栃木町○千葉町○小田原町○銚子町(以上)

第貳卷 奧

羽

方面地圖八枚(着色版)
 寫眞銅版八十二頁
 紙數八百八十頁

正金貳圓五拾錢
 小包料金拾六錢

第二卷重要目次

地文

第一章 地形 ○概説○磐城○岩代○陸前○陸中○陸奥○羽前○羽後○太平洋沿岸
第二章 海洋並に海岸線 ○津輕海峡及三陸海峽○日本海岸○海流及潮○庄内地震○陸羽地震○

人文

第一章 沿革 ○石器時代○佩玉時代○上古拓植移民時代○中古豪族勃興の時代○鎌倉時代○南北朝時代
第二章 政治宗教 ○豐臣氏時代○徳川時代○明治維新
第三章 産業 ○農業○林業○水産○工業○鑛業○商業

地方誌

概説。福島縣。青森縣。山形縣。宮城縣。秋田縣

銅版

○奥羽東北地方地形概圖○磐梯火山の圖○岩手火山の圖○岩木火山の圖○松島灣附近の圖○奥羽東北地方地質概圖○平泉沿革圖○仙臺市の圖(以上)
其他○藏王火山遠望○吾妻火山○駒ヶ嶽○岩手山○八甲田山○岡造配屋の圖○月山遠望○森吉山○寒目山○地質木版圖○層位圖○古器物○福島町地圖○白河町○平町○青森町○盛岡市○秋田市○山形市○米澤市○弘前市(以上)

第參卷

中

部

地文

第一章 地形 ○概説○尾張○三河○遠江○駿河○甲斐○伊豆○美濃○飛騨
第二章 海岸並に海岸線 ○相模灣○伊豆海並に其沿岸○海流及潮○近時に於ける主要なる地變
第三章 地質 ○汎論○始原大統○古生大統○中生大統○噴出岩○地體構造○鑛泉
第四章 氣象 ○氣温○氣壓○風向○降水量○霜雪○濕度

參卷重要目次

人文

第一章 沿革 ○石器時代○上古○寧樂朝より平安朝に至る○鎌倉時代○南北朝時代○諸族割據攻伐時代
第二章 政治宗教 ○豐臣氏○徳川氏の時代○維新以後
第三章 産業 ○行政○司法○軍事○教育○宗教○交通 ○農業○林業○水産○工業○鑛業○商業

地方誌

愛知縣。静岡縣。山梨縣。岐阜縣。長野縣

銅版

○中部地形概圖○富士火山頂上附近地圖○富士附近地圖○天城火山附近地圖○伊豆大島地圖○小笠原島父島地圖○淺間火山地圖○中部地質概圖○名古屋市街圖(以上)
其他○岡崎町地圖○豊橋町地圖○静岡市地圖○沼津附近地圖○濱松町地圖○知多半島海岸圖○甲府市地圖○岐阜市地圖○大垣町地圖○高山町地圖○長野市地圖○上田町地圖○松本市地圖○下田附近地圖○諏訪湖附近地圖其他數十圖

第四卷

近畿

畿

方面地圖六枚(着色版) 正金參圓
寫真銅版實景二百圖 紙數千二百七十四頁 小包料金拾六錢

地文

第一章 地形 ○概説○山城○大和○河内○和泉○攝津○播磨○丹波○丹後○志摩○伊賀○伊勢○近江○紀伊○淡路
第二章 海洋並に海岸線 ○伊勢海並に遠江海岸 ○熊野灘○紀州灘○紀伊水道○大阪灣其他
第三章 地質 ○汎論○始原大統○古生大統○中生大統○新生大統○噴出岩○溫泉
第四章 氣象 ○氣温○氣壓○降水量○霜雪○風向及風力○湿度

人文

第一章 沿革 ○先史時代○太古より大化改新以前迄○大化以後○奈良朝以前○奈良朝○平安時代○鎌倉時代○南北朝時代○室町時代○群雄割據時代○織豊二氏時代○江戸幕府及皇朝維新
第二章 政治宗教 ○行政○司法○軍事○教育○宗教○交通
第三章 産業 ○農業○林業○水産○工業○鑛業○商業

地方誌

京都府。大阪府。兵庫縣。奈良縣。三重縣。滋賀縣。和歌山縣

次
銅版圖

○近畿地形概圖○琵琶湖附近○近畿地方地質概圖○京都沿革圖大内裏圖○奈良沿革圖
○近畿中樞圖○京都市○大崎市○神戸市
○奈良市○堺市○姫路市○和歌山市○四日市市○津市○宇治山田市○西ノ宮町其他市街圖十數葉
其他市街圖
木版圖

第五卷 北

陸

方面地圖二葉(着色版)
寫真銅版八十六頁
紙數七百五十二頁
正金貳圓五拾錢
小包料金拾貳錢

地文

第一章 地形 ○概説○若狹○越前○加賀○能登○越中○越後
第二章 海岸及海岸線 ○若狹灣○越前加賀の海岸○能登半島○富山灣並越中
第三章 地質 ○汎論○原始大統○古生大統○中生大統○新生大統○火成岩○
溫泉
第四章 氣象 ○氣温○氣壓○風○濕度○降水
○天候○天候○霜雪の季節

人文

第一章 沿革 ○石器時代○上古○大化以後奈良朝○平安朝○源平二氏時代○南北朝時代○群雄割據時代
第二章 政治宗教 ○機豐二氏時代○德川幕府時代○明治維新
第三章 産業 ○行政○司法○軍事○教育○宗教○交通
○農業○林業○水産○工業○礦業○商業

地方誌 福井縣 石川縣 富山縣 新潟縣

銅版圖

○北陸地方地形概圖○金澤市街圖○新潟市街圖
○小原崎より白山遠望○奥の院より白山火港を望む○越後往昔地圖○妙高山遠望○機山遠望○鳥帽山群遊
望○信濃川河口變遷圖○地質層位圖○國造○戰國時代配置○德川幕府列藩配置○富山市○高山町○大聖寺
町○武生町○三國町○小濱町○敦賀町○小松町○七尾港○伏木港○直江津町○高田町○長岡市○新發田町
○村上町○相川町其他市街圖數葉

第五卷 重卷五第 次目要

第六卷 中

國

方面地圖一枚(着色版)
寫真銅版四十八頁
紙數八百四十頁
正金貳圓五拾錢
小包料金拾六錢

地文

第一章 地形 ○概説○美作○備前○備中○備後
伯耆○出雲○石見○隱岐
第二章 海岸並に海岸線 ○瀬戸内海○日本海岸
第三章 地質 ○汎論○古生大統○中生大統○
新生大統○火成岩○溫泉
第四章 氣温 ○氣温○氣壓○風○降水○天氣
○霜雪の季節

人文

第一章 沿革 ○石器時代○神話時代○王朝時代○武家時代○明治時代
第二章 政治宗教 ○行政○司法○軍事○教育○宗教
第三章 産業 ○農業○林業○水産○工業○礦業○商業

地方誌 岡山縣 廣島縣 山口縣 鳥取縣 島根縣

銅版圖

中國地方地形概圖○大山地形圖○三瓶山地形圖○中國地方地質概圖○岡山市街圖○廣
島市街圖
其他市街圖
○出雲國中の海より大山を望む○三瓶山遠望○青野山遠望○國造配置○戰國時代配置○毛利元就肖像○德
川幕府列藩配置○玉島町○津山町○尾道市○岩國町○徳山町○防府町○山口町○下ノ關市○萩町○島根市
○松江市○杵築町○浜田町等市街圖

第六卷 重卷六第 次目要

第七卷 四

國

方面地圖四枚(着色版)
寫真銅版五十六頁
紙數六百八十頁
正金貳圓五拾錢
小包料金拾六錢

第七卷重要目次

地文	第一章 地形 ○概論○阿波國○讃岐國○伊豫 第二章 海岸及海岸線 ○室戸岬に至る○土佐灣○豐後水道○速吸海峽○伊豫灘 ○安藝灘・熊灘及備後灘○備讃瀬戸及播磨灘○沿海の成	第三章 海流及潮 ○鳴門海峽及紀伊水 ○浦生田岬より	第四章 地質 ○汎論○始原大統○古生大統○中生大統○新生大統○火成岩○	
人文	第一章 沿革 第二章 政治宗教 第三章 産業	○石器時代○神話時代○王朝時代○武家時代○明治時代 ○行政○司法○軍事○教育○宗教○交通 ○農業○林業○水産○工業○鑛業	○溫泉 ○氣象 ○氣溫○氣壓○風力及風向○降水 ○雨量○天氣○湿度	
地方誌	德島縣 香川縣 愛媛縣 高知縣 (名勝、舊跡、都邑、溫泉、地勢、其他を詳説す)			
銅版	四國地方地形概圖 ○四國地方地質概圖 ○德島及高知附近圖 ○高松及松山附近圖			
其他挿入本版	○小豆島より五級山遠望 ○速吸海峽 ○地質断面圖 ○國造配置 ○戰國時代割據之圖 ○徳川氏未業列藩所在地 ○徳島市 ○高松市 ○丸亀市 ○松山市 ○高知市 ○須崎町			

第八卷

九州

方面地圖七葉(着色版)
寫真銅版七十一頁
紙數千二百五十頁

定價 參圓
小包料金貳拾錢

續刊 第九卷 ●北海道 第十卷 ●琉球及臺灣

田山花 袋君編 新撰名勝地誌

全二十冊

洋裝四六判上製美本
各卷銅版精密地圖挿入
紙數一冊五五〇頁以上
正價 金六拾錢
各冊 金六拾錢
郵稅一冊金八錢

既刊	卷一 畿内	卷二 東海道西部	卷三 東海道東部	卷四 東山道西部
----	-------	----------	----------	----------

(山城○大和○河内○和泉○攝津) 銅版精密地圖四葉本文刷込寫真版數十個挿入
(伊賀○伊勢○志摩○尾張○三河) 銅版精密地圖四葉本文刷込寫真版數十個挿入
(相模○武蔵○安房○上總○下總○常陸) 銅版精密地圖三葉本文刷込寫真版數十個挿入
(近江○美濃○飛騨○信濃○上野○下野) 銅版精密地圖二葉本文刷込寫真版數十個挿入

續刊	卷五 東山道東部	卷六 北海	卷七 山陽	卷八 山陰	卷九 南海	卷十 西海道	卷十一 北海道樺太	卷十二 臺灣琉球
----	----------	-------	-------	-------	-------	--------	-----------	----------

本書の特色は交通路に由て名勝を記したる其一也
産業沿革にも出來得る限り注意を拂ひたる事其二也
つとめて新しき材料に依りてこれを記したる事其三也
旅行者の伴侶たらしめんが爲めに紙質を精選し裝釘を堅牢ならしめたる事其四也

ことに最も特色とすべきは、編者の足跡殆んど海内に沿く、殘山剩水と雖も訪はざるなく、探らざるなく、従つて其記述と排列と頗る精確を極めたる事是也。況んや處々に各名勝地の寫真數十種を挿入し宛然人をして其地を踏むの思ひあらしむるに於てなや。旅行せんとするもの、各地の名勝の分布を知らんと欲するものば來りて本書を見よ。



平岡樺太長官 國府犀東君 序 小川運平君著
福本日南君 佐々木照山君

●發行所 博文館●

滿洲及樺太

全一冊

洋裝菊判紙數三百二十二頁
清朝全盛時
代北滿洲大地圖
外地圖一葉寫真版二頁入
正金九拾錢 郵稅八錢

滿洲樺太の經營論

樺太名稱考を始め、從來の學說を排して、斬新卓抜の説を爲し、或は千古の疑を釋き、或は未發の秘を闡き、唐代の以後千餘年間和漢の史乘を涉獵して、滿洲の地理歴史の概念より説きて、大陸と樺太の關係に及び、唐より金元を経て明清時代に到り、樺太に於ける日清勢力の交會期に筆を擱し茲に於て、無文の窮島をして、今日始めて光輝ある樺太島史を織成したる、著者の著目自ら一般史家と異なるものあるを見て、本書の價值を知るべし、本書は滿洲樺太の經世政治家軍人にも必要なり、滿洲樺太の在住民旅行家には缺くべからざる寶典なり、東洋學術の研究者地理歴史學者考古文學者にも必須の參考書なり、附録したる黒龍江圖及明代北滿洲圖は讀書家の最も珍重する所なるべし。

滿洲樺太の史跡考

清國駐屯軍司令部編

●發行所 博文館●

北 京 誌

全一冊洋裝菊判總クローソ
特製金文字入紙數九百廿頁
正貳圓五拾錢
小包料 金拾貳錢

▲卷頭——北京市街詳密地圖及北京城內寫真版四十二葉挿入

我が隣邦大清國は政治外交貿易の關係上我が國民の研究を急るべからざる所なり而して之れが首都たる北京の事情を知悉するは清國の大勢に通ずるの捷徑たらんか本書は清國駐屯軍司令部の編輯に係り紙數千頁を越えたる一大卷なるも内容は服部文學博士の幹理の下に清國精通の秩序整然條理明晰の調査精密叙説周到北京上下内外の情況は此一書に於て盡せりと云ふも不可なし本書以前に斷言するを憚らず苟も政治經濟家は勿論東洋諸邦の研究に志ある士の必ず一本を備ふべき要あり

清國駐屯軍司令部編

天 津 誌

全一冊洋裝菊判總クローソ
特製金文字入紙數六百八十三頁
正貳圓五拾錢
小包料 金拾貳錢

▲卷頭——天津市街詳密地圖及天津城內寫真版卅二葉挿入

朝鮮總督子爵 寺内正毅閣下題字
參謀總長伯爵 奧 保鞏閣下序文
陸軍少佐 日野強君著

伊 犁 紀 行

全三冊洋裝菊判特製函入
正金貳圓六拾錢
小包料金拾六錢

地圖 旅行線路
其他

口繪 伊犁將軍新驛
巡撫及筆蹟其他

挿圖 伊犁地方人情風俗
寫真版數十葉

萬朝報評 「前略」山あり、沙漠あり、奇病を見、狼群に遇ひ、或は乘馬病みて行く能はざる事あり、困難に克ち、缺乏に堪へつゝ各方面の觀察を遂げたる消息はこの上巻に依りて窺ふべく、更に概括せる地勢、地理、風土、風俗、宗教、教育、産業、交通、行政等に至りては下巻に俟ちて一目瞭然たるものあり、夫れ伊犁地方の地たるまた現下外交問題の一焦點たるなきにあらず、本書が此方面に於ける有数の資料たるはいふまでもなければ地理上、人類學上、文明史上その他諸方面に於ても有力なる著作たるを失はず。

博文館發行

國府犀東君著

菊判總布特製紙函入美本
上巻紙數千二百頁下巻千頁

發行所 博文館

大 日 本 現 代 史

全二冊
上巻 正金貳圓五拾錢
下巻 正金貳圓
小包料金拾六錢

比類なき人文の發展史

聖代を謳歌し活勢を描寫せるは此書第一の特色なり

宇内の大局を照應せし帝國を中心とし世界を觀たるは第二の特色なり

筆を彼兒孫の來露人の太平洋進出に起し日露戰役後及べ第三の特色なり

主要の史實を簡明直截の批判を加へ概觀を識得るは第四の特色なり

三十九年間ゆる出來事を網羅し餘蘊なく燎然しむるは第五の特色なり

一書大日本現代史直ちに是れ比類なき人文の發展史にして又異彩ある國家の大飛躍史也

異彩ある國家の大飛躍史

本書の特色

◎類書文地◎

理學士 吉田弟彦君著

(全二冊菊判紙數三百廿八頁)

地 文 學

並製金四拾錢 郵稅八錢
特製金五拾五錢 小包八錢



內 容

▲總論▲第一編 地球星學○地球の成因○太陽系○地球形状及大小○地球比重の測定○地球内部の狀態
○地磁器○地球の運動○緯度○經度○晝夜の長短○四季及五帶○日蝕及月蝕○地圖▲第二編 氣圈學○大氣○氣温○大氣中の水
分○氣圈に於ける光の現象○天氣及氣候▲第三編 海洋學○海の分布○海水の性質○海水の温度○海流○海底○海水運動▲
第四編 陸圈學○陸地の分布○陸地を構成する石○地史原統○地層の配置○種類○平原及窪地○山嶺及溪谷○河川○海岸線
○陸海の變動▲第五編 生物圈○生物の分布○生物の移動及變動○地球上に於ける人類○位置○日本の文明と天然の關係○
地球上人種の分布

理學博士 今村明恒君 講述
神保小虎君 譯述

地文礦物學叢話

正價金四拾錢 郵稅六錢

理學士 佐藤傳藏君著

地 質 學

全一冊菊判三百三十六頁
並製金四拾錢 郵稅八錢
特製金五拾五錢 小包八錢

礦物及地質

正價金五拾錢 郵稅六錢

我地球は曾て如何なる有様を呈せしや、現今如何なる有様に於て存在せしや、其由來如何、其構造如何等を説き盡したるを地質學となす、されば山岳の以て變ゆる所以、泉河の以て流る、所以、礦物の以て生ずる所以、岩石の以て變ゆる所以等は、此書に依て始めて明かにするを得べし、礦業に従業するも地文學の蘊奥を極めんとするも此書を讀まざるべからず。

◎類書天文◎

理學士 一戸直藏君著

(全一冊菊判紙數三百廿四頁)

高 等 天 文 學

並製金四拾錢 郵稅八錢
特製金五拾五錢 小包八錢



天文學は吾等が日常目撃する太陽、太陽、惑星、衛星、彗星、流星、恒星等の天體に就きて研究する一科學にして其範圍極めて廣し、故に之を研究するに近時數種の部分を立てり、本書は選に出版せし須藤學士之星學を讀みたる後更に進んで斯學の奧儀を研究せんとする人の資料に供する爲め是等の部分を追はす、最も自然的方法により漸次天體に關する事項を記載し、且つ説明せり、而して、第一是等天體の視運動及び實運動に關する法則を究め、第二是等天體の形状大小質量等を測定し、第三是等の理學的性質及び成分等を研究し、第四是等天體間の關係を講究する等、其最も重要な事項にして本書は實に遺漏なく之を説明せり。

理學博士 横山又次郎君講述

天 文 學 叢 話

正價金四拾錢 郵稅六錢

理學士 須藤傳治郎君著

星 學

全一冊菊判三三二頁
並製金四拾錢 郵稅八錢
特製金五拾五錢 小包八錢

近 世 氣 象 學

並製正價金四拾錢 郵稅八錢
特製正價金五拾五錢 小包八錢

○天體と地球の關係○地球の天に對する關係(天球を論ず)○天球と時との關係○地球上兩地に於ける緯度の差の測定法○天體の視察及び視半徑○星學上に必要なる諸器械○地球の運動○諸惑星の運動論(諸惑星の視運動)○惑星の共同運動を論ず○引力及其結果)○月の運動を論ず○月蝕及日蝕○時を論ず○地球より各天體に至る距離の測法○天體の比重及び質量○光の屈折反射及アベラシヨン及其他必要なる誤差率○太陽系統の構造を論ず○太陽○内惑星を論ず○地球○日○火星○小惑星○木星及其衛星○土星及其衛星○天皇星及其衛星○海王星○流星○彗星○星宿及等級○變光星及一時の恒星外七章

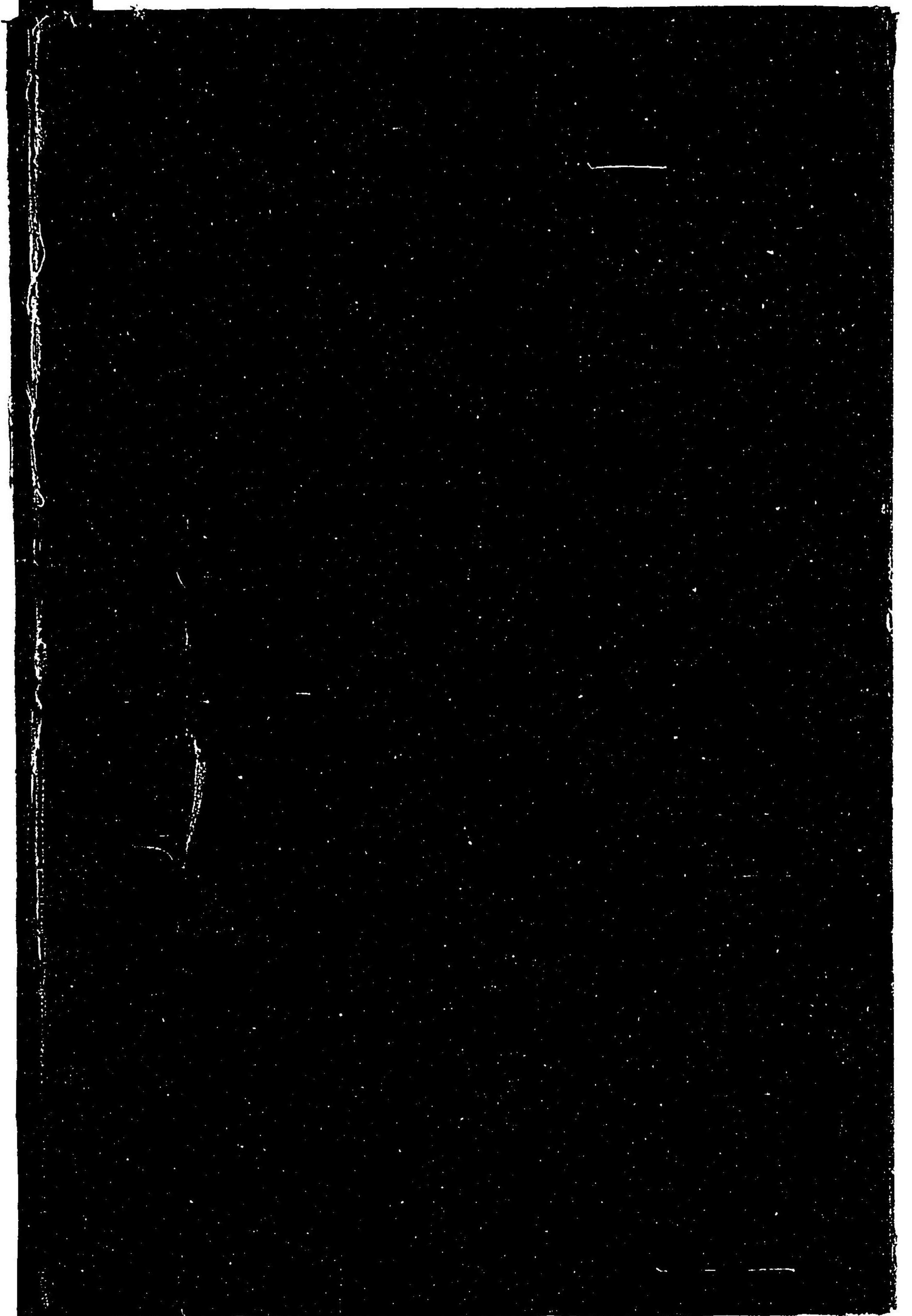
◎ 地 理 書 類 ◎

<p>法學士 山本信博君著</p> <p>● 政治地理學</p> <p>全一册 三百三十頁</p> <p>並製金四拾錢 特製金五拾五錢</p> <p>小包稅八錢</p>	<p>法學士 清水泰吉君著</p> <p>● 商工地理學</p> <p>全一册 三百六十二頁</p> <p>並製金四拾錢 特製金五拾五錢</p> <p>小包稅八錢</p>	<p>山崎理學士校附 石渡延世君著</p> <p>● 地理統計要覽</p> <p>全一册 二百六十二頁</p> <p>正價金五拾八錢</p> <p>郵稅金六錢</p>	<p>理學士 佐藤傳藏君著</p> <p>● 萬國新地理</p> <p>全一册 三百三十八頁</p> <p>並製正價金四拾錢 特製金五拾五錢</p> <p>小包稅八錢</p>	<p>理學士 佐藤傳藏君著</p> <p>● 日本新地理</p> <p>全一册 三百十四頁</p> <p>並製金四拾錢 特製金五拾五錢</p> <p>小包稅八錢</p>	<p>中村士總君著 大久保千濤君著</p> <p>● 本邦地理詳說</p> <p>全一册 七百頁</p> <p>正價金壹圓八拾錢</p> <p>小包拾貳錢</p>	<p>法學士 勝部國巨君著</p> <p>● 清國商業地理</p> <p>全一册 三百五十八頁</p> <p>並製金四拾錢 特製金五拾五錢</p> <p>小包稅八錢</p>	<p>文學士 田淵友彦君著</p> <p>● 韓國新地理</p> <p>全一册 三百五十五頁</p> <p>並製金四拾錢 特製金五拾五錢</p> <p>小包稅八錢</p>
--	---	---	---	--	---	--	---

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館 振替貯金口二番〇

77

260



77
260

M

022617-008-2

77-260

大日本地誌

佐藤 伝蔵 / 編

卷8

M36-T4

ADB-0328

